D

2010. May
第 4 号
日本演出者協会 協会誌「ディー」

題字 千田是也
新劇の代表的演出家・千田是也氏の文字をロゴデザインに使用。
（資料提供／早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）

特別対談『贅沢な仕事』

仲代達矢×鵜山 仁

Contents

- 若手演出家コンクール2009
  - 最優秀賞決定!! 御笠ノ忠次インタビュー ……2
  - 優秀賞インタビュー ……3
  - 公開審査・講評 ……4
- 特別対談『贅沢な仕事』仲代達矢×鵜山 仁 ……5
- 演出家養成セミナー 2009
  （札幌、愛知、熊本、下関、京都）……8
- 日本の近代戯曲研修セミナー2009 ……10
- 国際演劇交流セミナー 2009
  （ルーマニア・カナダ）……12
- 理事会報告……13
- 部会だより……13
- 各地域活動通信 ……14
- 新入会員紹介 ……15
- 退会者 ……17
- コラム 篠﨑光正「ここだけの話・・・」……17
- アンケート「演出者の仕事」……18
- データで見る演出者協会 …… 20
- 編集後記 …… 20

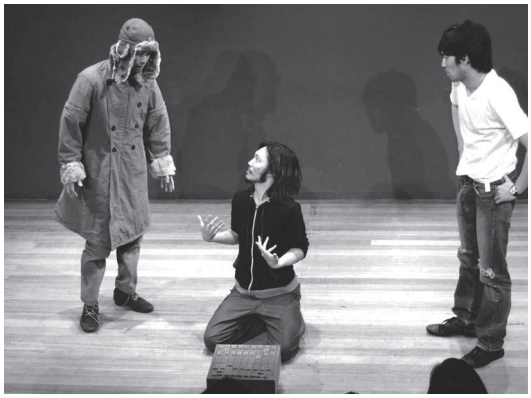
日本演出者協会会誌「D」（ディー）第 4 号　定価＝無料　2010 年 5 月1日発行　平成20年11月創刊（毎年2回発行）

【発行人】和田喜夫（理事長）【編集人】篠﨑光正（広報部長）【編集委員】篠本賢一・長沢けい子・三谷麻里子・平尾麻衣子・小川功治朗・大杉良・磯村純・ゴトウモエ・小林拓生【対談編集】鷲谷憲樹【発行所】日本演出者協会　東京都新宿区西新宿6丁目12番30号 芸能花伝舎3F（〒160-0023）電話03-5909-3074
【編集・制作】日本演出者協会広報部協会誌「D」編集委員会【題字】千田是也「Marionetto」より【印刷所】有限会社一光堂印刷【表紙デザイン】前嶋のの【本文デザイン】奥秋 圭

若手演出家コンクール2009最優秀賞決定!!

御笠ノ忠次（SPACENOID）
作品名：『個人的な話』
（作＝御笠ノ忠次）

インタビュー



応募動機――僕、初年度と2年目に出てまして、で、また出たっていうか。

初年度は優秀賞で2年目は奨励賞をもらったんですけど、最優秀賞だけもらっていないので、もらうまでは出てみようかなって。

今回の作品について――今回、初年度にやったお芝居のシステムだけ持ってきて、じゃあ29歳になって、初年度やったときは童貞だったんですけど、僕今結婚もしてまして、そうなった時に出てくる言葉ってやっぱり変わってくるだろうな、って思ってて。同じシチュエーションにおいて作ってみたところがあって。歳をとった自分もわりと肯定的に。自分が年齢を重ねたせいか、当時敵だと思っていた人も、ま、敵じゃないってことに気づいたりとか。本当にいろんな人に迷惑をおかけしました。

協会に望むこと――めったに顔を出さないんで。ホント（笑）。久しぶりにこう、協会の集まりに顔を出したんですけど、「本物だ」、「本物だ」って言われて。でも、若い頃に僕が、思っていたことで、言語化できなかったことっていうのがあって、協会の人たちなんかも、あんたは違うんじゃないかって思っていた人たちがいたんですけど、今、僕が歳を重ねたせいってこともありますし、なんか、リンクするところがたくさん増えてきていて、できることがあれば、この7年間くらい何にもお役に立ったことも無いですし、何か一緒にできればいいなって僕は思ってます。

今後の展望――なんか、演出っていう概念って、もう少し広くてもいいのかなって。やっぱり10年くらい、舞台演劇を続けてきて、それはもちろん続けていくんですけど、なんかその、世の中と関わる手段として自分の演出ってものの考え方とか、スキルとかを使っていけないかなっていう風には最近考えてますね。だから、ぜんぜん違った、お店経営するでもいいし、商店街の町おこしみたいなことでもいいし。演出家って、まあいろんな考え方あるでしょうけど、今あるものをよりよくしようとしているっていうことがあると思うんです。そういう風に、演劇っていう手段、が、世の中ともう少し関わっていけるように、そうなれるように動いていきたいなって。

優勝コメント――感謝する人は、本当、名前を挙げればきりが無いんですけど、故人だから、もう届かないから。昔いた劇団に、すごい厳しい人がいて、僕ずうっとその人が嫌いで劇団やめたんですけど、結局その人が僕のことを考えてくれた上で僕にすごい厳しかったっていうことを、その人が亡くなるまで気づけなかった。他の人たちは直接、こう、感謝することができるんですけど、彼だけはもう亡くなっちゃったんで。

【御笠ノ忠次】高校卒業後、劇団「1980」に二年間所属。その後、「スペースノイド」の演出家として本格的な活動を開始。「若手演出家コンクール2001」で優秀賞を受賞。2002年、前年度に続き奨励賞を受賞。

若手演出家コンクール2008最優秀受賞者 智春さんインタビュー

――昨年の最優秀賞で、変わったことは？

特に目立って変わったことはないですね。ただ昔よりも「パフォーマンスのスキル（技術）をお芝居にするにはどうするか」、「抽象的なものをどうやって具象性のあるものにして行くか」を考えるようになりました。

――コンクールで刺激を受けて？

審査の講評で「台本が無いから芝居として成立してない」的なことを言われたのが、一番ひっかかっていました。「なんかじゃあ、悔しいから次はお芝居にするわい」と……。で、「とりあえず台本さえあれば何とかなるだろう」みたいな（笑）。

――それで、（昨年度コンクールで争った）「すがの公」氏に台本を依頼したのですか？

去年のコンクールのあとの打ち上げです（笑）。せっかく知り合いになったんだし、どうせ次も作品やらなきゃいけないなら、じゃあもう、そこで生まれた何かって感じでやれないかなと。

なにぶん、そんなにプライドとか無いので、こだわらなきゃいけないところが無いんですよ。逆に、こだわらないっていうところにこだわってます。

自分が「面白い」と思ったことはものすごく素直に、その人たちの要素とかをどんどん取り入れるっていう方向性が強いですね。

だから今回もいわゆる一般的な、お芝居の台本を、どうやってフィジカルに切り替えるか？　とストレートに取り組んでみました。

――今後も台本ありの形式で？

うーん、どうでしょう。今回のすがのさんとのコラボは、これはこれで楽しかったですけれど。でもまた違う流れが出てくるような気もするんですよ。

やりたいことは大道芸でできてしまうので、逆にそこでやっているパフォーマンス・表現を、もう少しコラボレーションして、化学変化を起こしたらどうなるのか？　それを劇場で試してみたいなと思っています。

チィキィ＊パークゥがどういう方向に転がっていくのかも、まだ、私にも分からないです。ただ私は作品をどんどん壊して、もう一回違った形の〝何か〟を創り上げる作業をしていくことが多いので、再演や次回作はぜんぜん違ったものになるかもしれませんね。

若手演出家コンクール2008最優秀賞受賞記念公演
チィキィ＊パークゥ『オーライオーライ～僕なら大丈夫。～』
演出・振付＝智春　作＝すがの公（ハムプロジェクト）
2010年3月12日（金）～14日（日）下北沢「劇」小劇場

【智春】ストリートアーティストのショー、イベント企画、学校公演、競技大会の選手振付、ワークショップまでを手がける演出・振付家。パントマイム・クラウン・アクロバットを軸としたサーカス芸をベースに幅広い表現方法を学び、自身もパフォーマーとして活躍。

優秀賞インタビュー

優秀賞・観客賞

長谷川達也

［DAZZLE］

作品名『ØNE（縮約版）』（作＝飯塚浩一郎）

応募動機――友人から「（コンクールに）送ってみれば」と言われたのがきっかけなんですが、昨年、他の演劇祭の方で入賞させていただいた経験から、ダンスでも評価してもらえるかも、という期待を込めて、応募してみました。

今回の作品について――言葉を語ってしまうことで、踊りという存在が言葉の次になってしまうんじゃないかと。でもダンスだけで表現した場合に、感情以外の細かな物語を伝えるのは難しい。そこでテキスト表示という方法を選びました。

言葉を音で発するわけではなく、テキストで表示するという方法は、他にも例えばゲームやアニメーション、コミックだったりと、現代のジャパニーズカルチャーの要素をとりいれたかったという理由もあります。そしてそれが世界的にみたときに、東京の体現として受け入れられやすいのでは？という期待もありますね。また、文字を読むことで、音で聞くということよりも想像力をかきたてる部分もあるのかもしれないという可能性を模索しつつ、こういう形になりました。

今後の展望――世の中には様々なダンス公演がありますが、僕たちのような形態の舞台は今のところ僕は見たことが無いので、ダンスにもこういった表現があるんだということを多くの方に伝えていきたいです。ダンスに馴染みのない方も楽しんでもらえる自信もあるので、ダンスの価値や可能性を感じてもらいたいと思っています。

協会に望むこと――協会とはどういったシステムなのか、を把握できていないので、それがより明確になればという希望でしょうか。

ただ、僕が感じている演出者協会というのはおそらくは演劇の方たちが中心かと思っています。その中で僕たちダンスが、どこまで入っていけるものなのかというところは、ちょっと挑戦でもあるし、そこも模索していきたいと思っています。

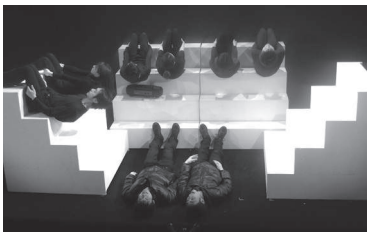
【長谷川達也】ダンスカンパニー「DAZZLE」主宰。ダンサー、振付家として多くのアーティストのライブ、PV出演・振付を手がける。2009年、舞台『花トロ』がグリーンフェスタ最優秀作品賞を受賞。

優秀賞

鹿目由紀

［劇団あおきりみかん］

作品名『階段話』（作＝鹿目由紀）



応募動機――戯曲を書くのを先にやってたんですけど、ここ数年、演出が楽しくなってきていて、演出家コンクールを知ったときに、興味が湧きました。劇作の自分のスタンスと違うことができるんじゃないかって。

今回の作品について――私たちは「喜劇」と銘打って活動している劇団なんですけど、今回はあんまり喜劇、喜劇って考えてませんでした。大事にしたのは、記号の中に見えてくることもあるだろうっていう感じですかね。感情はどうでも良くて、記号的なもの、つまり今回でいうと「階段」なんですけど、それに当てはめると見えてくるものはあるはずだ、と。「こういうもの」っていうのをある個人的な感情で出さなくても、その記号から、自分なりのアプローチで勝手に考えてくれないだろうかっていう。ひとつの考えを押し付けないのがいいんじゃないかと思ってました。まあ、でもやはり、私自身は人間を否定的に捉えていないので、肯定的な解釈は押し付けているのかもしれません。

協会に望むこと――もっともっと地域で分けないでやっていけないだろうかと思います。個人単位で。でも去年、演劇大学に関わってみて、面白いなぁと思いました。演劇大学は、「（地域）ならではの」っていうよりは、いろんな人のいろんな考え方が一気に垣間見れる、みたいな感じなのかもなぁと。だけどもっとエイジレスでありボーダーレスになっていけばいいなぁ、って思います。

【鹿目由紀】劇団あおきりみかん主宰。劇団の全ての作・演出を手がける。「中学生日記」等のテレビドラマ、ラジオドラマの脚本、他劇団の作・演出、専門学校講師、高校演劇大会の審査員など幅広く活動。

優秀賞

城谷歩

［劇団深想逢嘘（ウタタネ）］

作品名『虚苑（コエン）』（作＝城谷歩）

応募動機――今回の舞台監督と一緒にやろうってことになったときに、こういうコンクールがあるよ、って。とにかくお前はそういうのあんまりやらないから、やれ、と。で彼の方が歳ちょっと上なんですけど、あの太い腕だから、断ると何されるか分からないんで、送ったんです。

演出として――僕はね、自分では、役者だと思っているんです。やってきた流れで言うと、演出も兼ねてやってきた期間も結構経っちゃいましたから、今はもうどちらがどっちっていう言い方は、あんまり、正直分かんないんですけど。一番皮切りは、僕は役者でこの世界に興味を持って飛び込んできて、ずっと役者だけでやってた、と自分は思ってるんですけど。

協会に望むこと――まだ正直、いろんな要望が出てくるほど、分かっていないというか、今回こちら来るのでお芝居作んなくっちゃいけなくていっぱいいっぱいで。なので、もちろんその、北海道もそうだし、他の地域にしても、観ていただくお客様も、作っている人たちも、もっと盛り上がっていけば良いなって。僕も今回こういう形で呼んでいただけたけど、どうしても若いうちなんてのは、お金も無くて、個人の劇団でできることが、もちろん努力次第っていうことではあるけれども、ああここもっと手貸して欲しいなっていうこととか、こんなことあるといいなってことってあるので、だから、そういうところで、繋がりを持って行けたら良いなあって思ったりしますね。

これからの展望――もちろん地元でもそうですし、よりたくさんのお客様に見ていただけたりとか、自分がその時タイムリーに見たいと思える作品を、自分がそこにお客様と同じ立場に立って観た場合に、やっぱり面白かったって思えるような作品を本当に作っていきたいです。でも、作るだけで満足せずに、やっぱりたくさん感激するお客様も増えていただきたいなって思ってます。

【城谷歩】2000年「劇団深想逢嘘（ウタタネ）」を結成。全ての公演を作・演出し、出演もこなす。完全オリジナルの他、文学作品を下敷きにした作品など年間1～2本の定期公演、客演なども行っている。

若手演出家コンクール 公開審査

審査員は瓜生正美・貝山武久・加藤ちか（舞台美術家）・木村繁・小林七緒・佐野崇匡・篠崎光正・土橋淳志・西沢栄治・森井睦・流山児祥　11名の審査員が2票ずつの投票権を持つ。

青井陽治・七字英輔両氏は交通トラブルで最初の数分を観劇できなかった作品があるため投票を辞退した。

今回は全員が総評を述べたあと自由に発言し、優秀賞の4人への質疑応答も行われた。

総評（全審査員の発言より抜粋）

【木村】毎年感じるが、最終選考に残った劇団のスケジュールとコンクール開催日の問題で本領発揮できないこともあるのではないか。今回はそれが如実に出ている。

【流山児】東京はほぼユニットで演劇をやる時代だけど、今回は全部劇団が参加している。

「劇団」でしかできないことを貫いてる4人が集まったことはちょっと感動的だと思う。「演劇」でしか出来ないローテクなコトをずっと、集団で追及してほしい。10年後この4人は演劇の現場にいるだろうと確信した。いいコンクールであった。来年で10年を迎えるこの人材育成事業は確実に成果を上げている。

講評（全審査員の発言より抜粋）

鹿目由紀［劇団あおきりみかん］

【木村】普段骨太な作品をやっていることを知っているだけに決勝の作品はちょっとぬるかったと思う。階段を出すことが転換でどうも役者の芝居を助けていない。

【加藤】階段を出すことが「直球だよ」と言ってあげたくなる。階段の使い方が予想の範囲だったことが残念。

【小林】発想の面白さがやっている役者に落ち切っていない気がする。ワークショップの発表会の匂いがすることが、好きな作り方をしているだけに見ていて悔しかった。

【森井】階段と怪談がかかっていることがすぐにわかる。それだけにもっとおどろおどろしい世界になっていって欲しかった。

城谷歩［劇団深想逢嘘（ウタタネ）］

【西沢】役者城谷さんのファンにはなった。自分が出演しているからできる演出もあるだろうから出ていることに問題はないけど男性2人の出演者だけで見たくなる。

【瓜生】後ろの女神と前の男2人の世界が高い次元で統一して欲しかった。バラバラなのを意図しているようにもちょっと見えない。

【貝山】演劇は作と演者と観客があって演出家はその接点に立つ役割がある。作演出と出演もしているせいか演出の仕事にもうひとつ足りていない。

【加藤】作ったセットと箱馬を置いていること城谷さんが出ている後ろで予定調和じゃないことが起きても大丈夫だという前提をお客さんに与えてる。計算高いんだけどその計算が見え過ぎている。

長谷川達也［DAZZLE］

【木村】2次予選のビデオを見ると空間の処理もうまくて力があると思う。言葉の表現はあんなに必要なのか。

【加藤】演出家というよりはレベルの高い振り付け家だと思った。演出はそれを更に客観的に見るべき。

【土橋】アドベンチャーゲームの立ち絵とテキストのように身体とテキストの関係が律儀すぎる。ズレなどを持ち込むことによって新たな関係を作るともっと面白くなるのではないかと思った。

【篠崎】文字を出すのはあった方がいいと思う。ただ、どこを脚本にするのかは考えた方がいい。物語が動く、心が動く部分を無声映画の字幕のように文字にしてショー的要素をなくしていくと他にはない面白いものになるのではないか。

御笠ノ忠次［SPACENOID］

【佐野】御笠ノさんという人を知ってたらもっと面白かっただろうと思う。フラットに芝居が始まることに僕は違和感があった。けれん味という点で言えば4作品の中でいちばんあったのではないか。

【小林】コンクール初年度参加の時と同じ風を装って実はすごく大人になっている。100%信用してる2人の役者を上から降らせて始めるっていう潔さは好き。

【森井】2次審査までの予想とは違う作品で驚いた。泣いてる役と平和に将棋さしてる役のイラク対日本の対比に見えるシーンには感動した。

【土橋】こんな知的で正直な作品ないと思った。自分の創作過程を晒すという意味でも露出狂。自意識過剰っぷりが笑える。

1回目の投票は図の通り。

	鹿目	城谷	長谷川	御笠ノ
瓜生正美	★		★	
貝山武久			★	★
加藤ちか	★			
木村繁	★			
小林七緒	★			
佐野崇匡		★		★
篠崎光正		★	★	
土橋淳志	★			★
西沢栄治	★			★
森井睦		★		★
流山児祥	★			★

7票の鹿目・9票の御笠ノで再度1票ずつで投票。結果、鹿目4票・御笠ノ7票で御笠ノ氏が最優秀賞を獲得した。観客賞は長谷川氏が受賞。

七字氏の「演出家のコンクールだと言ってもほぼ全員劇作もしている。みんなが同じ作品を演出するなど形式を考えてみてもいいのではないか」という疑問の投げかけによって幕を閉じた。

劇作をしていてもしていなくても、演出者の仕事は「演劇をつくる」ことである。どうつくるのか、演劇で何をするのかという仕事の部分がコンクールでは問われている。〈文責・三谷麻里子〉

贅沢な仕事

特別対談　仲代達矢×鵜山仁

俳優・仲代達矢氏と演出家・鵜山仁氏の対談。舞台の内と外から見える風景の違いが重なり、「スイカ割り」や劇団の役割を立体的に巡った。

――長年演技者として活躍していた仲代さんが演出もされています。仲代さんにとって演出とはどういうものかということに我々は大変興味があるんです。

仲代■僕は役者ですからね、本当は演出にはそんなに興味がないんです。無名塾という小さなグループを作っておりまして、役者の卵を集めていろいろやって、なんとなしに三十年近くなるんですけれども。結局、場所を提供してるだけでね。たまたま、演出家が誰も協力してくれないときに、演出を何本かやったことがあるんですけれども（笑）。演出という演出は、ほとんどやってないんですね。ただ、長いこと気心の知れてる役者が何人かいて、それでできるみたいなもんで。演出って仕事は、役者から比べればぜんぜん別のものだと思いますし。役者って、僕も含めて、不思議な動物ですから（笑）。客観的に見られないんですよね。本当は、役者が演出してはいけないと思っていますよ。

――仲代さんとしたら、どういうことをしているのが演出だと思いますか。

仲代■かつて安部公房さんのところでグループ作ってやってたときに、役者は、作者を超えるくらいもっと勉強しないといけないと言われたものです。そのころはなんだかわからなくてね。理想は、作品のことを本当にわかって、この作品でどう演劇的にやるのかまで追求しなければいけないんですけれども、役者ってどうしても自分の役柄だけ入り込むんですよね。ですから演出というものは…、例えば「スイカ割り」ってありますよね。海岸で、スイカがここにあるんです。目隠しされて、グルグルって回されて、「はいこっちこっち」って言ってくださる。役者にとってはそんな感じでしょうか。それで、こちらの勘が悪いと「こっちだ！」と言われても砂を打ったりということもあるかも知れませんけれども。

写真：岡本隆史

鵜山■僕の場合は、ひとつは岡目八目というやつで。いまおっしゃったように、当事者同士では見えないことが見える第三の目線というか、お互いに相手役と丁々発止やっている時に見えないものが、こっちからはやや見える。そういうところが芝居作りの面白いところだと思います。そうでないと演出者の存在意義がない。いろんなモノの見方が共存してる場だからこそ演出の役割ってのがある、僕としてはそこにこだわっていきたい。稽古場では退屈するアンテナをできるだけ磨いておきたい。つまり、ひとりの俳優さんが充足してても、相手役や三人目が充足してないってのがお客さんにとってちょっと辛い時間だったりするじゃないですか。そこに客観的な見方を付け加えていければと思ってるんですけど。スイカ割りのスイカを、共に発見しようってスタンスでやっているのかな。

仲代■黒澤明さんが「芝居作りたい」って言うんですよ、演劇を。「作ったらどうですか」っていうと「うーん、あのね君ねえ、初日始まるだろ、ダメってわかって舞台に駆け上がれないだろ」って言うんですよ（笑）。「そういうとき諦めなきゃしょうがないだろ。演出家ってね、つらいと思うんだ」って。映画は編集で演出力を発揮する場合もありますからね。演出家って、絶対にいなきゃしょうがないでしょうね…。演出家の言ったちょっとしたことをね、役者がどう確実に解釈できるか。ただね、解釈したからできるってもんじゃなくて、演出家や作家が何の意図でこの芝居を作っているのかを、役者はもっと察知しないといけないと思います。

――鵜山さんは作品のことに対して、役者に説明していく方ですか？

鵜山■どうも僕はゴールが最初から見えないタイプで。雑な話ですけど、とりあえず変化していけばいいと思ってるんです。たとえば「おはようございます」と言った

役者って、僕も含めて、不思議な動物ですから。客観的に見られないんですよね。（仲代達矢）

ことで相手の顔色が変わる。「おはよ」という相手からの返事が、こっちがある「音」で言わなかったら出てこなかったような「音」で返ってくる。そのことで三人目四人目の登場人物も変わる。その結果、場面のはじめと終わりでは、世界というか空気が確かに変わってる。そういうことの繰り返しで、関係がどんどん変わり、新しい発見がある。個人個人の引き出しにある身動きとか音は、どうもたいしたもんじゃないように思えるんですね。毎日同じ電車に乗って同じ駅で降りて同じ会社に通っていて、ルートは決まっているのに毎日毎日が全然新しいっていうこの感じ。これが不思議なことに四十五過ぎてから感じるようになった。それと同時に再演がすごく面白くなってきたんですね。黒澤明さんじゃありませんけど、確かに今日開けた舞台を次の日観てみると、いろんなノイズが入っていてもどかしい思いをしたことも無いではないですけど、むしろそういうことが無いと生きてることにならない。ライブってそういうものだと。日々の稽古場でも、わずか二か月空けて再演しただけでも、驚くほどお互いの感覚ってのが変わるものですよね。

――良くもなるし悪くもなるし。

仲代■実際舞台をやって。自分で「ああ、あそこできなかったな、もっとうまくやれたな」というところが「今日こそは！」と思って幕開いて、それもまたうまくできない。映像の人たちは「なんでそんなに飽きずにできるの？」って言うんですよ。それ説明したって、映像だけやっている人には理解できないらしいんですよね。良く言えば、もっとうまくなりたいとか、日々新たに役との関係を深めたり、お客さんが芝居全体をどう観ているのかを知りたいんですけど、なかなかわかりませんね（笑）。

――関係をやりとりするキャッチボールのボールにあたるものは決めていくんですか。

鵜山■僕の場合は台詞ですかね。台詞が翻訳で妙にゴツゴツしていること自体にも、やっぱり楽しみが（笑）。

仲代■私は苦しみですよ（笑）。私は、なんだか知らないですけど、翻訳劇が多いんですよ。何十本もやっているんですけどね。英語では十秒で終わる台詞が、日本語だと三十秒もかかってしまう。それどうしたらいいのかな、と。日本語は、西洋の演劇をやる上で、果たして的確なのかなと思うことがあるんですよね。

鵜山■たとえば「神様」とかいう言葉が以前はすごく煩わしかったんですけど、最近は、並の言葉でなかなか言い切れない、個人を超える何ものかが、洋の東西で、実は共通なんだなって思ったり、時代を隔てて同じ憧れや切望感を持ったりするんだろうなって、そういうことがわかってきて、むしろその違いを感じて、現場が軋むことが面白い…

仲代■役者辛いんですよねー（一同爆笑）。いや、辛いというよりも技術がない、言いこなせないというかね。それをたとえば作者のせいにしたり翻訳のせいにしたりしたがるんですけど、役者の方が技術的にうまい具合に表現できればいいのかなと思ったりはするんですが。

鵜山■我々からすると、そのギャップっていうのは、いくぶん、リアクションで埋められたり。たとえば「神様」と言ったときに「そんなこと言いませんよ、普通」って返すと、そこに関係性ができたりね。そのギクシャクにつけこむ余地があるというべきか。

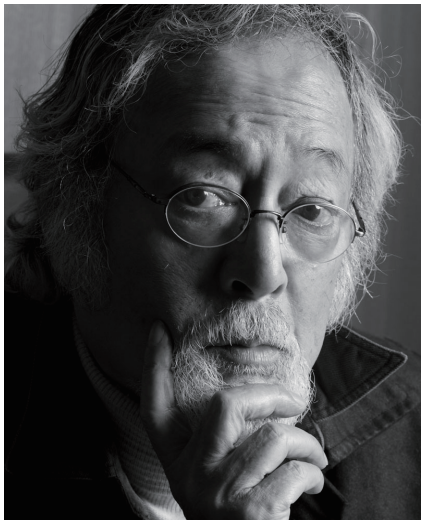
仲代■なるほどね。私の方もそれは救われますね、わっはっは！　関係っていうものが、台詞を運ぶだけに終始しちゃうってことが、あるんですよね。僕らは台本を何回も読むけれど、お客さんは基本的に一回しか観ないですよね。そこで未だに、オレは役者に向いていないんじゃないかって思うんですよ（笑）。

鵜山■さっき「音」と言いましたけど、言葉のレベルで言えば「おいしい」と「うまい」はどう違うのかって、面白いところだと思うんですよね。それも、自分の中の引き出しからではなかなか出てこない。わかっている筋立てを毎日稽古している中で、とんでもない「おいしい」が出てきたりする瞬間ってのは必ずあって。その瞬間って、世界が壊れるような感じがするんですよね。めったに無いけれど（笑）。やっぱりそういう瞬間を求めてやってて。楽しみは、そこへ行くプロセスでどれだけ道草食えるか、なんじゃないでしょうか。

仲代■ただ役者って、自分をこう、守りたいんですよね。もうブチ壊していいかなって思う気持ちもあるけど。予想外のことが起こるっておっしゃったと思うんですが、役者って守りたがりなんです。

――演出家は逆で、「壊したがり」ではないですか。

鵜山■そうなんですけど、こう壊そうと思ってこう壊れたというのは、別にたいしたことないんですよ。これがめんどくさい（笑）。ぶつかって化学変化するっていう



仲代達矢（なかだい・たつや）
劇団俳優座出身で、「無名塾」を主宰。舞台と映画で活躍する戦後の日本を代表する俳優。主演作『影武者』がカンヌ国際映画祭グランプリを受賞するなど米国アカデミー賞と世界三大映画祭（カンヌ・ヴェネチア・ベルリン）のすべてで受賞し四冠を達成。2007年文化功労者。

瞬間って、企んで作り出せるわけじゃないし、好奇心というか、変わりたいという志がないとそうはならない気がする。「壊す」ってことについては、実はいつも怯えてて。僕の場合はとくに、文学座に長くいるわけで。アトリエ公演なんかでやってきたことが自分にとってのスタンダードみたいな気がしてる。そんな、「既にある形」っていうのを揺さぶっていかないと発見がない、面白みがないですよね。「壊す壊す」なんて言ってますけど、かなり保守的なんだと思います。

――これからの演劇、俳優、劇場についてどのように感じていらっしゃいますか。

鵜山■清水邦夫（「木冬社」代表）さんは、役者を育てるには発酵倉庫みたいな暗くてジメジメとしてて、だけどそこに樽を置いておくだけで良いワインができるような場所が必要だっておっしゃってて。劇団ってのはそのためにあるんだと思う。もっとも、その成果をときどき持ち寄って、もっと広い市場で品評会みたいなものをやらないと表現の幅は拡がっていかないんですが…ともかく発酵倉庫がないと練り上げられないものというのが、いますごく難しいところに来ている。自分が、たまたまここ三年ばかり公共劇場にいて実感したことでもありますけど、そういう蓄積を国や公が肩代わりできるかというと、そう簡単にいくものじゃない。育つ場所、育む場所を保証していくのはすごく難しいことだと思うんです。

仲代■無名塾は、だいたい五人くらいしか新人を取らないんですけど。えー、食えないんですよね（笑）。みんな映像に流れるんですよね。とはいえ、うーん、国の補助で劇場は建っても劇場としての活動は人間がしなきゃいけない。お役所だけに任せていたらペンペン草が生えるだろうと。どっか狂ったような人がね（笑）、一、二、三人いてね、やっていかなければしょうがないんだろうと。我々が死んでも、劇場は残ってるんで。非常に難しいところに来てますよね。これから次世代の若い人が、どうやって演劇ってものにお客さんを集めてくるのか。魅力的な俳優、演劇がですね。エンターテインメントだけのものはいっぱいありますし。劇場に足を運んで、来た甲斐があったってものがね、あればいいですよね（笑）。

鵜山■そういう意味でも、劇場をオーガナイズするってことを考えていかないといけない。僕はものすごくそういうのが苦手だったんだけれども、初台の新国立劇場に行って考えが変わったんですね。演出者の役割ってのは、教えることだって言ってもいいんでしょうか…新しい表現の担い手をどう作るかっていうことが、気になりだしている。個人的には、少なくともそういう作業を執念深くやっていかなきゃとは思っているんですけど。

――無名塾を長くされて、若者の変化ってありますか。

仲代■やっぱり、ぜんぜん芝居観てないですよね。それは僕たちの力の弱さかも知れないんですが。これだけメディアが発達しちゃいますと。演劇に関しちゃ、最近僕は少数派であることを誇りに思って。なるたけお客さんを集めようとは思わない境地に達しましたよ（笑）。

鵜山■劇場が満杯になればいいってもんじゃないだろう、ってどっかで思ってる。満杯を狙うだけなら違う仕事をしている気がします。僕らの仕事はちょっと特権的なというか、贅沢な仕事でいいんだと思います。

鵜山仁（うやま・ひとし）
劇団文学座所属。新国立劇場演劇芸術監督。主な代表作に『グリークス』（第25回紀伊國屋演劇賞団体賞）（文学座）、『コペンハーゲン』（新国立劇場／第9回読売演劇大賞優秀演出家賞）『父と暮せば』『円生と志ん生』。オペラやミュージカルなどの演出も手懸ける。

『贅沢な仕事』　仲代達矢 × 鵜山仁

仲代■お客さんを選んじゃいけないんですが、観に来てくれるお客さんだけに向けて一生懸命やろうって思いがありますね。

鵜山■劇団の力っていうものを、もっと評価した方がいいんじゃないか。演出はひとりでは何もできない仕事なんで、よけいそう思うのかもしれないですけど。情報は確実に広がっているわりに、新しい観客や俳優が入ってこないっていう状況がある、この矛盾をもう一回、芝居の力に転化していくための、仕掛けと知恵を探しているところです。

仲代■その個々というか、演劇人としての幸せって、どっか根城みたいなところを持ってて、羽ばたいてまた戻ってく、みたいなものかもしれませんね。

――でも無名塾って、傍から聞いているとそういういい所じゃないんですか。

仲代■昔、俳優座時代、辞めると言ったら「いままで育てたのに！」って、いろいろ言われた経験があるんで、そういうのは空気よくしとこうと思って。三年終わったら出て行って、無名塾辞めたかったら他に行ってもいいし。でも、ほとんど帰ってこないのです（笑）。

――演劇をやめられない理由はなんでしょうね。

仲代■理由、わかんないんですよね。最初に入ったんで。僕は律儀なんですかね、わっはっは！　それか腰が、お尻が重いんですか。同じ事務所も六十年間一緒なんですよ。

鵜山■演出の才能があるとはあまり思えないんですけど、少なくとも他に能がないのははっきりしているんで。大学同期には一部上場企業に入った連中が多いんですが、ぼちぼち定年、なんて年頃になると、お互いにたいして違ったことやってこなかったってことが身にしみてわかる。まあ自分としては、性に合ったポジションが見つかったのかなと。他に行っても、手に職もないんでダメなんじゃないかと思っています。

【了】

演出家養成セミナー2009報告

演劇大学 in 札幌

（報告＝横尾寛）

2009年9月25日～12月23日
コンカリーニョ（開校式）9月25日
シアターZOO（閉校式）12月23日
その他、札幌市内各所で開催
講師　青井陽治、羊屋白玉
担当　清水友陽、イトウワカナ、橋口幸絵、すがの公、横尾寛

札幌の演劇大学は、劇団主宰者が集まって実行委員会を作って企画してきた。何年か続けて、お互いの芝居を観たり演劇のことで話し合う機会も増えた。良いことだと思う。演劇大学の内容は、毎回メンバーの興味あることを出し合って決めるのだが、難しい。それぞれ問題にしていることが違うのだから、難しい。それで考える。今、それぞれが、何を問題にして演劇をしているのか。そのことを問うこと自体が演劇大学にならないか。

ちょうど9月から12月にかけて、みんなが稽古と公演を抱えていることも分かった。そこで、各劇団の稽古を公開し見学とディスカッションを行い、公演後にもディスカッションの時間を設けて、お互いの現場でどのような作業がなされ、何を問題にしているのか、それを見る。あるいは見られる。そんな、長期間の演劇大学にしてみた。

今回は実務面がうまくいかなかった。稽古公開日の設定や参加者への周知方法など、煩雑で難しい面が多々あった。現場は各劇団に任せられるからいいのだが、長期間の企画になると、もっと人手がないと出来ない。実行委員会の形式で続けるなら、主体的に動く人がもうちょっと必要だ。

それにしても、よその稽古を覗くのは面白かった。せっかく今回やれたので、今後も興味があればお互いに見たり見られたりをしたら良いんじゃないか。公演後のディスカッションは、作った人と、今まさに出てた俳優と、今観てた参加者がその場で話し合うわけだから、あんまりうまくいかないことも多いし、なんでもやればいいってもんでもないと思ったが、自分の公演の時はそのとき何人かに指摘されたことがすごくよくて（どちらかというとダメな点の指摘だったが）、ああ、やっぱり見られるとこは見られてしまうんだなあと、改めて、当たり前のことを思った。

今後の札幌の演劇大学をどうするかはまだ未定ですが、今、演劇を作ることとちゃんと結びついたものであればいいなあと思います。

演出家養成セミナー2009報告

演劇大学 in 愛知

寺山で遊んじゃえっ！

（報告＝齋藤敏明　演劇大学 in 愛知実行委員会事務局長）

2009年11月6日～8日
愛知県芸術劇場小ホール
愛知芸術文化センターアートスペースE・F
愛知県芸術劇場中リハーサル室
講師　青井陽治、高田恵篤、鹿目由紀
羊屋白玉、天野天街、谷口葉子、流山児祥
和田喜夫、清水義和
担当　木村繁（実行委員長）、齋藤敏明（事務局長）
ほりみか（広報）、トリエユウスケ
金子康雄、佐久間広一郎（制作）
共催　財団法人愛知県文化振興事業団

昨年に引き続き、演劇大学 in 愛知が財団法人愛知県文化振興事業団との共催により開催されました。今回のテーマは「寺山修司」。最近では学問としても研究されている「寺山」を、過去の遺物ではなく同時代の演劇テキストとして取り上げ、いくつかのセミナーなどを展開しました。

まず、「寺山修司ヲ演出スル」と題した特別シンポジウムでは、天井桟敷で活躍した高田恵篤と名古屋の女優谷口葉子、寺山修司をこよなく愛す演出家和田喜夫、流山児祥、天野天街らが寺山の思い出、寺山作品の魅力、演出の方法論などについて、国際寺山修司学会会長の清水義和（愛知学院大学教授）のコーディネートのもと語り合いました。

2日目には、劇場を飛び出したオルタナティブ空間や女性の身体を通しての女性の心象を描き続ける羊屋白玉の演出論を、ワークショップ形態で実践を通して講義しました。

会期を通して若手演劇ライブシアターとドラマリーディング実践講座とが行われました。寺山の初期のラジオドラマ作品である『ある男、ある夏』と人形劇台本として書かれた『狂人教育』の2作品をテキストとし若手演劇ライブシアターの参加グループを募集したのですが、演劇組織KIMYO（代表、演出家　宮谷達也）1グループのみの参加になったため、俳優、演出家志望者を集めてのリーディング講座形態に変えて、両講座を実施しました。青井陽治が若手演劇の指導を行い、鹿目由紀が『ある男、ある夏』、高田恵篤が『狂人教育』のリーディング指導をそれぞれ担当しました。最終日に3作品の発表会とそれに参加した　講師と演出家、出演者による公開講評会を行いました。

また、協賛事業として、国際寺山修司学会総会も行われ、研究発表と「寺山修司の俳句と短歌と海外演劇」シンポジウム、「シュールレアリストとしての寺山修司」特別講演が行われました。

（敬称略）

演出家養成セミナー2009報告

演劇大学in熊本

「終わり」から「始まり」へ

（報告＝山南純平）

2010年2月4日～2月7日
熊本県立劇場　和室、中会議室
講師　流山児祥、古城十忍、坂口瑞穂、和田喜夫
シンポジウム「地域演劇の可能性」
瓜生正美、堀田清、五島和幸＋上記講師4名

2006年のプレ企画から始まった「演劇大学in熊本」は今回で4回目である。熊本では今回を以て最後となるが、次回は福岡。九州レベルの「演劇大学」へつないでいくことになった。

会場は例年通り、熊本県立劇場（和室・会議室）を使って、夏目漱石の『夢十夜』をもとに劇を創りあげていく。4人のドラマドクター（流山児祥・シニア／古城十忍・経験者／坂口瑞穂・初心者／和田喜夫・学生）のチームに分かれる。『夢十夜』の脚本化から作業に入るため、演出希望の受講者には当日までに脚本を作成してもらった。だが、中には「書き直し」や「没」等もあり、4日間の講座の1日目は戯曲講座の様相を呈したチームもある。

例年通り最終日には発表会があるため、俳優志願の受講生も真剣そのもの。短期集中セミナーはオーバーヒートする。どのチームも熱い。

この期間中に「地域演劇の可能性」と題し、瓜生正美と講師（ドラマドクター4名）、地元からは劇団石、市民舞台の老舗劇団主宰者らがパネラーとして参加する。瓜生正美からの「昭和の演劇史」の中で「プロレタリア演劇＝職場組合劇団」の話があり、若い演劇人には耳慣れない言葉ではあるものの新鮮さを感じたようだ。又、新しい動きとして「文化芸術振興基本法」を地方でどう現場の演劇人が活用するか、等の熱い議論が巻き起こる。

熊本ではリージョナルシアターやリーディング活動が地道に繰り返されている。演劇に関わる裾野を広げる企画であるが、安易さへ流れることの弊害、あるいは小劇場の没個性化の現象も気になっている。

今後の活動として大きな課題を突き付けられた「演劇大学」になった。（敬称略）

演出家養成セミナー2009報告

演劇大学in下関

夢見ろ！演じろ！さあ遊ぼう！

（報告＝加藤孝明）

2010年3月13日～3月14日
海峡メッセ下関
講師　和田喜夫、篠崎光正、宮田慶子、高都幸男、福止大輔
シンポジウム・パネラー（講師以外）
加藤孝明、武部忠夫、池本博文、雄姫うさぎ
担当　赤松美花、橋本美穂

演劇大学が、2010年3月13日（土）と14（日）、初めて下関で開催され、市内外、県内外から、俳優や演出家を目指す人、演劇鑑賞を楽しみたい人など99名が参加しました。講座のべ参加数は174名でした。

3月13日は、最初に開校式を行い、今回の実行委員長である劇団新波団長の加藤孝明が挨拶、その後5名の講師陣からそれぞれご挨拶を頂き、各講座に移りました。

各講座はそれぞれ、演出法を宮田慶子先生、レクチャーを和田喜夫先生、シノザキシステムのワークショップを篠崎光正先生、シアターゲームを高都幸男先生に、ご担当頂き、お話をされながら、また時には実演されながら、参加者に演技の楽しさ、奥深さについてご講義頂きました。

和田先生は、迫力のあるしゃべりで、時には先生自ら動かれ、参加者も動きながらの熱い講座で、体の緊張をなくすためのグニャグニャ体操が印象的でした。篠崎先生には、時間によって、相手によって、その時の感情によって、台本上一貫したテーマをどう表現するかを教えて頂きました。宮田先生は、演出する上で困ったことが生じれば必ず台本に戻ること、時には台本を読んでいる自分の環境を日常とは違うところに置き換えて読んでみると新たな発見があったりすること、答えは全て台本の中にあると説明されました。高都先生には、芝居は相手の台詞に対する受けが重要で、役者同士が伝えるべきモノのキャッチボールが必要、そのために相手の気持ちや考えを察すること、合わせること、即座に反応することが大切だと教えて頂きました。

演劇大学の各会場は、まさに何もなかった空間の空気が変わり、全く別の空間になっていき、大変な盛り上がりをみせていました。どの講座も、講座を終えた参加者の顔が、受講前とは変わり、生き生きと充実感に満ちていたのが印象的でした。たくさんの参加者から「また、近い内に、下関で演劇大学を開催して欲しい」という熱いメッセージも頂きました。

演出家養成セミナー2009報告

演劇大学 in 京都

（報告＝椋平淳）

2010年3月18日～21日
京都府立文化芸術会館　京都教育文化センター
講師　網谷正美、貝山武久、菊川徳之助
　　菊池あずさ、福田善之、松本祐子
シンポジウム・パネラー
「京都の若手注目劇作家・演出家が自由に語る」
あごうさとし、木ノ下裕一、山口茜、山崎彬
司会・木嶋茂雄
「京都の劇場展望」
森山直人、杉山準、丸井重樹、椋平淳（司会兼）

関西では久々の開催となる「演劇大学」が、2010年3月18日（木）～21日（日）の4日間、京都府立文化芸術会館をメイン会場として開催された。この15年ほどの間に「岸田」その他の戯曲賞受賞者を次々と生んだ京都は、全国的に「劇作家の宝庫」というイメージが強い。また、廃校の再利用事例としても注目される京都芸術センターをはじめとして、演劇を創造する環境の豊かさについても評価は高い。とはいえ、経済や文化行政の動向によって舞台創造の土壌が大きく変化してしまう心もとなさは、他の中小の都市とまったく変わりない。したがって、幅広い年代の多様な演劇関係者（劇作家・演出家・古典芸能の担い手・研究者・一般観客層など）が集うなかで、現時点での京都の演劇状況を歴史を含めて集約し、今後の着実な発展に向けての情報交換や人材交流を日本演出者協会なりに進めること――これが、京都であえて「演劇大学」を開催することの意義として浮かび上がった。

プログラムは、まず実技講座として、「演出家・劇作家養成セミナー」（講師＝福田善之氏）や「俳優養成セミナー」（講師＝松本祐子氏）といった「演劇大学」恒例のものにくわえて、一般層を取り込むべく「シニアのための演劇ワークショップ」（講師＝貝山武久氏、菊川徳之助氏）を実施した。座学系プログラムとしては、発信力の強い「劇作家」と「劇場」という京都ならではのシンポジウムを2本組み入れ、東京・名古屋など各地の演劇関係者も聴衆に交じるなか、それぞれ4人のパネラーが今後の展望・抱負を語り合った。さらには、同時開催された協会の「日本の近代戯曲研修セミナー」、それとリンクする日本演劇学会の研究会、古典芸能を代表して狂言の実演講座、会場である京都府立文化芸術会館主催の古典演劇講座（マスターピース工房）、京都ゆかりの演劇団体の資料展示（上演許可書に記されたブレヒトの直筆サインやGHQの検閲印など）などが脇を固めた。いずれのプログラムにも予想を超える多数の参加者が集まり、熱気に満ちて実りある4日間となった。

日本の近代戯曲研修セミナー

1月9日（土）芸能花伝舎
木下杢太郎作『和泉屋染物店』演出＝ふじたあさや
出演＝小竹伊津子、伊餘田笑子、松村佐世子
宇夫方路、瓜生正美、中西和久、流山児祥
高山正樹、宮越圭子（三味線）

久保田万太郎作『釣堀にて』演出＝中村哮夫
出演＝伊藤克、佐川和正、一柳みる、名越志保
戌井市郎、宮田慶子

シンポジウム「近代戯曲を読むということ」

3月8日（月）「劇」小劇場
泉鏡花作『山吹』演出＝篠本賢一
出演＝佐々木梅治、早野ゆかり、伊藤克
千賀ゆう子、小林拓生、左藤慶

3月9日（火）「劇」小劇場
泉鏡花作『湯島の境内』演出＝青井陽治
出演＝北川能功、樋口武彦、谷口明大

シンポジウム「ふたつの鏡花」

3月16日（火）大阪市立芸術創造館
岸田國士作『モノロオグ&クロニック・モノロゲ』
演出＝井之上淳
出演＝尾崎麿基、八田麻住

坪内逍遥作『役の行者』演出＝笠井友仁
出演＝大坊晴彦、笠井美帆、高阪勝之
堀部由加里、森田祐利栄

3月18日（木）京都府立文化芸術会館
鈴木泉三郎作『生きている小平次』
演出＝キタモトマサヤ
出演＝松尾オサム、菊谷高広、坂本正巳、こやまあい

三島由紀夫作『道成寺』演出＝山口浩章
出演＝二口大学、広田ゆうみ

協会の新たな事業として、「日本の近代戯曲研修セミナー」が始まった。この企画はもともと、故・観世榮夫氏が早稲田大学演劇博物館との共催で近代戯曲のリーディング上演として提案されたものを、実現の直前に、逝去された観世氏の遺志を協会が受け継ぎ、ここに開催の運びとなった。

研修は、リーディング作品を上演するということを目的にするのではなく、作品、作家の研究、実際上演する上での問題点の考察などを議論し、試行するなど、通常、多くの稽古場で行われていることを中心に研修することが検討された。そして、取り組む課題を日本の近代戯曲に絞り、日本の近代戯曲が持つ問題提起、演劇的価値、上演意義などを問いまた応えるということを、研修を通して多くの人が触れ、学ぶ機会を与える場として企画されたのである。

リーディング上演／発表会は、研修での問題提起を公にし、応答の場としてシンポジウムを開催することで、出来るだけ多くの人たちと研修をともにする機会を設けることが企画され、第1回、第2回のシンポジウムでは演劇以外の専門家や、過去に演出された演出家をアドバイザーに迎え、「読み」かつ「語る」研修セミナーとなった。

また、「近代」という時代を問い直す作業がますます重要になってきている現在、この研修セミナーを通して「近代」に向き合うことも重要なテーマのひとつである。この重要なテーマは演劇上演と同じように答えが出るものではないが、この研修セミナーはその問いかけに応えていくものになるだろう。また一口に近代といっても、それは時代的区分による近代を考えることもあるだろうし、政治的区分、社会的区分によって近代をとらえることも出来る。その捉え方がそれぞれのジャンルの思想・理念となるのであり、演劇は近代をどのようにとらえていくのかということを行った近代戯曲の中に、私たちは1人では手に負えぬほどの問題提起を見出すことができる。協会で発刊した『演出者の仕事　戦後新劇』で、近代批判という、近代との関係がまとめられたように、この研修セミナーが演劇におけ

る近代という思想を再考する場になれば幸いである。

東京

東京では、第1回を1月9日に芸能花伝舎の教室で、第2回を下北沢「劇」小劇場にて、3月8日、9日の両日行った。第1回は、木下杢太郎作品『和泉屋染物店』をふじたあさや氏演出、久保田万太郎作品『釣堀にて』を中村哮夫氏演出でリーディング上演した。5日間の稽古／研修には、俳優に加え理事を含めた協会員も多数参加、リーディング出演者は、演出者協会ならではの顔ぶれとなった。『和泉屋染物店』は、「ある事件」を契機に家族の背後に忍び寄るものを、余所事浄瑠璃によって効果的に示されていることが三味線演奏で実証され、戯曲をただ読むだけでは理解に苦しむところなどがうまく演出された。『釣堀にて』においては、今では聞くことのできなくなった久保田万太郎の台詞の音に触れ、その言葉の持つ表と裏、登場人物の社会的立場などが浮き彫りとなり、会話では平行線のように思えながらも微妙に絡み合う人間模様に作家が何を書こうとしているのか、じわりじわりと伝わるものとなった。

そして近代思想、特に『和泉屋染物店』が扱っている大逆事件の専門家山泉進氏にはシンポジウムで大逆事件について語って頂いた。シンポジウムではさらに、出演もされたアドバイザーの戌井市郎氏をはじめ、研修に参加していた瓜生正美氏、流山児祥氏、宮田慶子氏も加わり、近代戯曲を読む上での言葉の問題から思想の問題まで二つの戯曲の持つ奥行きを語りあった。

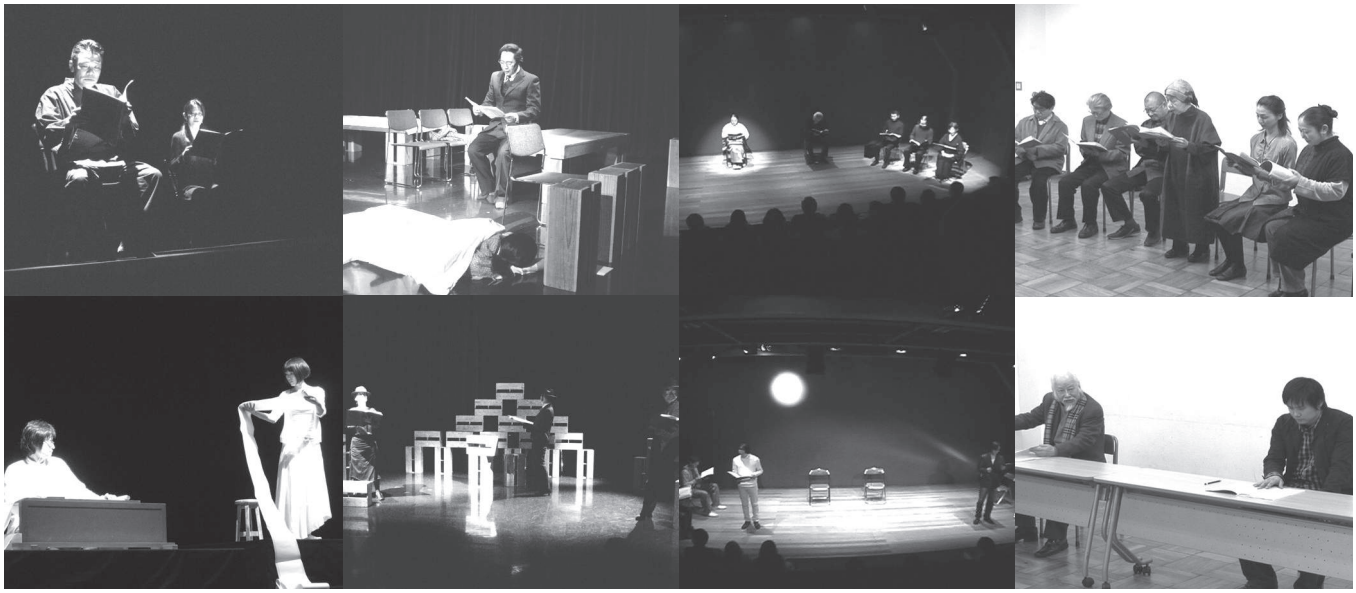
第2回は、泉鏡花から2作品『湯島の境内』演出を青井陽治氏、『山吹』演出を篠本賢一氏、2日に分けてのリーディング上演となった。稽古は9日間で、稽古場を解放し見学自由とした。見学者からの評判も良く、近代戯曲に取り組む演出家の言葉を熱心に聞き、台本に書き込む姿も多く見られた。

上演は、鏡花作品から2作品ということもあり、2人の演出家がどのように取り組んでいくのか注目された。『山吹』は、戯曲の構造を分析し、語句の一つ一つまで詳細に解釈していくことがなされていた。その為、戯曲全体が構造的に浮かび上がり、鏡花がどのように近代を見据え、そして近代が排除したものを扱っているのかが明確に示された。『湯島の境内』では、青井氏のミニ・レクチャーから始まり、余所事浄瑠璃の手法を現代版として示すなど、現在、鏡花作品は如何に上演できるのか、その可能性が示された。また演技法も、演じるということを再認識させるようなシアトリカルな手法を用い、研修の発表としてもとても興味深いものとなった。

アドバイザーは、『山吹』初演の演出をされた中村哮夫氏に総合アドバイザーをお願いし、また、シンポジウムでは泉鏡花研究の田中励儀氏に来ていただき、鏡花の上演史についてお話を伺った。シンポジウムでは参加した協会員全員が出た為、戯曲が持っている問題を深めていく時間がなくなってしまったのが残念だったが、それぞれ参加した想いを語っていただけたのは、この企画がこれからじっくりと多くの想いをのせて充実していくことを予感させる一幕だったのではないだろうか。

※第1回、第2回ともに会場は満席、立ち見も出る大盛況でした。また、初めて協会の企画に参加したという協会員も多く、今後も協会員が積極的に参加出来る企画になればと思います。参加希望者は協会事務所までご連絡を下さい。

（佐々木治巳）



『生きている小平次』『道成寺』　『モノロオグ』『役の行者』　『山吹』『湯島の境内』　『和泉屋染物店』『釣堀にて』

関西

日本の近代戯曲セミナーin関西は、大阪と京都で行われた。3月16日、大阪市立芸術創造館にて井之上淳氏演出による岸田國士作品2編『モノロオグ』・『クロニック・モノログ』が上演され、笠井友仁氏演出による坪内逍遙作品『役の行者』が上演された。両作品上演後は宮本啓子氏による解説が行われた。

3月18日、京都府立文化芸術会館にて山口浩章氏演出による三島由紀夫作品『道成寺』が上演され、キタモトマサヤ氏演出による鈴木泉三郎作品『生きている小平次』が上演された。両作品上演後は阿部由香子氏による解説が行われた。キタモト演出は観客の聴覚に訴えかけることにより劇世界を想起させる演出を施し、井之上・笠井・山口の3氏は簡素な舞台装置（平台や箱馬・椅子等）から劇世界の広がりと深淵を演出した。アプローチの仕方は様々であったが4人の演出家は共に、これら「近代戯曲の名作」が時代を問わず人間の普遍的心理を描いた作品であることを再認識させてくれた。解説では各作品の初演当時の状況も話され、現在の演劇人と先達の演劇人との共通点を知る機会を得た。また新しい演出技術の発達により、初演当時とは異なった手法で劇世界を構築出来ていることを知り、実りの多いセミナーとなった。

（田中孝弥）

ルーマニア特集

ルーマニア演劇の現在
～演出家アレキサンドル・ダリエを囲んで～

（報告＝松森望宏）

2009年10月3日
新宿村スタジオ11スタジオ
講師　アレキサンドル・ダリエ
　　エミル・バネア
　　七字英輔、小林勝也、柴田義之
通訳　ダニエラ・パンタジ
担当　篠本賢一、松森望宏、左藤慶
参加者　54名

2009年は、ドナウ川が流れるオーストリア・ハンガリー・ルーマニア・ブルガリア4か国との日本の外交関係の周年が重なることから、『日本・ドナウ交流年2009』と名付けられ、日本及び各国において記念行事が行われた。日本の劇団も盛んに交流を持った年となり、日本演出者協会では「ルーマニア特集」を企画し、「劇団1980」の協力のもと、ブカレストのブランドラ劇場芸術監督アレキサンドル・ダリエ氏及び同劇場支配人エミル・バネア氏を招聘しシンポジウムを開催した。

元大統領チャウシェスクの独裁長期共産主義政権から1989年のルーマニア革命を経て現在の民主主義体制に至るまでの歴史の転換期に、ダリエは演劇を通して社会に問いかけてきた。ルーマニア革命を振り返り「社会主義崩壊前夜の真実は、個々のレジスタンスではなく、国民の大きな意識を形成したことにある」と熱っぽく語る。その大きな意識が西の文化をも形成する人材を育てた。そしてダリエは「私たち自身が社会主義から離れれば離れるほど気がつくことが出来た。東西は大きな壁ではない。私たちの生活の根っこは、昔からあるのです」と語る。

ブランドラ劇場はブカレスト初の民間劇場である。参加者からの質疑応答の中で、「社会主義体制の中でも、ずっと民間でやっているのか」との意見があった。「革命以前から民間で、財政はもちろん困難を極めている。市役所の援助もある。革命後20年が過ぎようとしているが、今は社会主義のよさがわかってきた。高い値段にしたら若い人たちが見に来てくれない」と本音を語る。6割を超えるルーマニア国民が革命以前の社会主義体制のほうが生活が楽だったと言う。貧富の差が激しくなり『革命後遺症』を抱える今、ダリエの瞳は新たな問いを真摯に受け止めようと進化を続けているようだった。

カナダ特集

（報告＝貝山武久）

2009年10月26日－10月30日
京都府立文化芸術会館（リーディング&シンポジウム）
明治学院大学　白金キャンパス3号館3203（レクチャー）
芸能花伝舎（ワークショップ&シンポジウム）
講師　ワジディ・ムアワッド、吉原豊司、貝山武久、森井睦
担当　森井睦、貝山武久、前嶋のの
参加者　京都（シンポジウム）54名
明治学院大学（レクチャー）47名
芸能花伝舎　WS27名　ワークショップ見学18名　シンポジウム48名

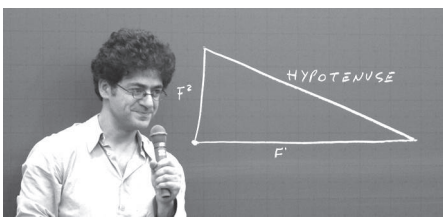
2009年度の国際演劇交流セミナー「カナダ特集」は、カナダ演劇の新しい波と称えられるワジディ・ムアワッド氏を向かえ、10月26日～30日迄、京都と東京で開催された。氏は、レバノン生れで、9才の時、戦禍を逃れてフランスに移住、さらに1983年にカナダ・モントリオールに転居。現在はオタワの国立劇場の仏語部門芸術監督を務める、俳優作家演出を兼ねる演劇人である。

代表作『夢』『クロマニオン家の結婚式』『焼け焦げ』三部作のすべてに、氏の幼少からの戦時体験が反映されている。今回は、協会国際部長でもある、ピープルシアター森井睦演出による『焼け焦げるたましい』公演とも連動した企画で、レクチャーとワークショップ・シンポジウムがそれぞれ開催された。

仏アヴィニヨン演劇祭に招かれるなど、世界的に活躍する氏であるが、その名前を高名にしたのは、俳優と共に長期間のワークショップを積み重ねて舞台をつくる、という特異な創造方法にあり、その点での発言が注目された。京都では初めての「カナダ演劇特集」ということもあり、翻訳の吉原豊司氏によるカナダ演劇概況が事前にレクチャーされ、続いて京都の演劇人たちによる『焼け焦げるたましい』のリーディングも行われた。期待通りワジディの講演内容は、俳優との長期に渉る共同作業を通じて、劇的世界が多角的な広がりをみせ、多様な表現に結び付いてゆく様が、参加の人達に興味深く、感銘を与えた。

東京では、明治学院大学に於いても一日共催され、氏の創作体験が同様に、参加の学生さん達にも理解が届くように語られていた。

ワークショップは花伝舎で、二日間に渉って開催され、およそ20名以上の人達が参加した。此処では俳優たちとの共同作業の一部が実際に行われたわけだが、従来の、動きを主体としたワークショップとは対照的な、頭脳的でイメージ豊かなその創作トレーニング方法に、戸惑いながらも大きな示唆を得ていたというのが印象的であった。最終日に行われたシンポジウムでは、これまであまり語られて来なかった、モントリオールを中心とする仏語圏のカナダ演劇についても語られ、短いながらも充実したセミナーとなった。



理事会報告　篠﨑光正

平成21年10月22日（木）於：協会事務所／出席理事11名　委任10名

議題①平成21年度の事業結果・経過報告

▽第1回日韓演劇フェスティバル

総括をすべきだということで、和田理事長よりこの件で、事業の決算が出たところで緊急理事会を開催する旨の発言があり了承。

▽若手演出家コンクール2009

第2次審査対象の16名の審査経過報告。

▽国際演劇交流セミナー2009カナダ

▽演出家養成セミナー2009

愛知・熊本・京都・下関

▽日本近代戯曲研修セミナー2009東京

議題②平成22年度の事業の提案、検討

平成21年11月13日（金）於：協会事務所／出席理事13名　委任8名

議題①平成21年度の事業結果・経過報告

▽若手演出家コンクール2009

第2次審査対象の16名の審査経過報告。第2次審査会12月3日協会事務所で開催。

▽国際演劇交流セミナー2009

カナダ特集についての進捗状況報告。

▽演出家養成セミナー2009

▽日本近代戯曲研修セミナー2009

平成21年12月27日（日）於：協会事務所／出席理事14名　委任7名

議題①平成21年度の事業結果・経過報告

▽第1回日韓演劇フェスティバル

和田理事長より会計中間報告を受けて質疑応答。継続案件とすることを決議。

▽若手演出家コンクール2009

第2次審査後、4人の選抜者のうち1名が日程上の理由で辞退。次点繰り上げを決議。

▽日本近代戯曲研修セミナー2009

議題（協議）②助成制度

平成22年2月24日（水）於：協会事務所／出席理事9名　委任12名

議題①平成21年度の事業結果・経過報告

▽若手演出家コンクール2009

▽国際演劇交流セミナー2009

中国特集の中止についての報告。

▽演出家養成セミナー2009

3月の京都、下関の進捗状況報告。

議題（協議）②「劇場法」についての意見集約および協議。

平成22年3月30日（水）於：協会事務所／出席理事9名　委任12名

議題①2009年度事業報告

▽演出家養成セミナー2009下関・京都

▽日本の近代戯曲研修セミナーin大阪、京都

▽出版・演出家の仕事

▽出版・年鑑・国際演劇交流セミナー2008

議題②2010年度助成事業

1．演出家養成セミナー2010松山（7／16～19ひめぎんホール）・福岡（8／4～7）・中津川（9／17～20）・旭川・横浜・高知（2／19～20）・盛岡・愛知・広島

2．若手演出家コンクール2010（新たに記念公演含む）

3．国際演劇交流セミナー2010カナダ・フィンランド・韓国①・モルドヴァ・ベルギー・ドイツ・韓国②

4．日本の近代戯曲研修セミナー2010東京・中津川・札幌・京都大阪・東京

5．出版・年鑑・国際交流セミナー2009

議題（協議）③劇場法に関して

議題（協議）④日韓演劇フェスティバルの結果について

議題（協議）⑤50周年記念行事

6．その他

議題（審議）⑥会員組織　会員に従来の会員に新たにサポート会員を加える。会費同額。

議題（審議）⑦演出家養成セミナーin下関

2011年度に実施。

議題（審議）⑧協会ロゴ審査：該当者なし（募集を再度実施決議）

部会だより

事業部

今年度も「演劇大学」と「若手演出家コンクール」の2つを中心に活動していきます。

「演劇大学」は9ヵ所での開催を予定しています。各地で活躍している方と東京の演出家のつながり、また地元の演劇人同士が出会い一緒に芝居作りをやっていくきっかけになれば、と思います。

「若手演出家コンクール」も10年目を迎えます。実力派の応募者も増え、最終決戦は見ごたえのあるものになっています。新たな才能発掘というコンクールの目的に加え、参加者同士はもちろん、審査員と参加者の世代を越えた交流の場にもしていきたいと思います。（小林七緒）

国際部

今年の国際演劇交流セミナーの最初を飾るのは、カナダ演劇界に彗星のように現れた若干28歳のジェイソン・マガノーイ氏。彼の処女作『兵士たち』のリーディングとレクチュア。そして、日本の若手演出家10人との「いま演劇で世界は描けるか」をテーマにしてのシンポジウムを東京6月1～2日、大阪3～4日とおこないます。8月の中頃からは東京と大阪で韓国の演出家イ・ユンテク氏のワークショップによる韓国特集。9月17～20日までは中津川（岐阜）でヘイニ・ヌカリ氏のワークショップがおこなわれるフィンランド特集。10月上旬にはルーマニア特集としてペトル・ヴトカレウ氏のワークショップ。そのほかベルギー特集でウルヴィントーレ氏。ドイツ特集としてはアレクシス・ブーク氏。韓国特集第二弾ヤン・ジョンウン氏を招いてのワークショップがあります。乞うご期待のほどを。（森井睦）

広報部

広報部は協会誌「D」の編集発行だけではなく、協会活動にさまざまな提案を行っているが、その中でも日本各地に点在する会員への広報および相互交流を常に大切にしていきたい。そのため広報部が各地の会員と行政との橋渡しを果たす広報活動ができるように、事業の整備を推進し新たな事業を提案し、協会誌配布先もさらに範囲を広げていきたい。また、経済的理由から暗礁に乗り上げている懸案のインターネット導入について、今後1年間をかけてホームページを立ち上げ、海外を含め各地の会員との意見交換およびホットな情報を集め会員の活動を支援していきたい。（篠﨑光正）

法務部

法務部のこれまでの仕事は、演出者の権利を法的にどのように守るかが大きな課題でした。これからも、演出者の権利や適正な演出料契約について法務として考えていかなければと思っています。その上で、政権が変わり文化政策、文化行政が大きく変わりそうな状況のなか、特に、にわかにクローズアップされてきた「劇場法」（仮称）について研究し、他の団体とも意見交換しなければと思っています。そして、協会としてこの法案についてどのように考えるのかを議論して行きたいと思っています。法務担当は初めてですので、どうぞよろしくお願いいたします。（西川信廣）

日本演出者協会　協会の事業担当

【理事長】和田喜夫

〈部名〉部長◆担当理事◆部員〉

【事業部】小林七緒◆青井陽治、鵜山仁、菊川徳之助、木村繁、坂手洋二、篠﨑光正、宮田慶子、流山児祥◆〈東京〉千葉哲也、外波山文明、林英樹、松森望宏、〈関西〉井之上淳、金子順子、木嶋茂雄、田中孝弥、棚瀬美幸、椋平淳、森本景文、山口浩章、芳川雅勇〈東海〉鹿目由紀、菊本健郎、齊藤敏明、竹内菊、はせひろいち、トリエユウスケ〈熊本〉亀井純太郎、山南純平、〈仙台〉渡部ギュウ、〈札幌〉清水友陽

【国際部】森井睦◆青井陽治、鵜山仁、貝山武久、坂手洋二、篠本賢一、堀江ひろゆき、松本祐子◆〈東京〉青柳敦子、家田淳、小林拓生、黒川逸朗、佐々木治己、左藤慶、中野志朗、洪明花、前嶋のの、松森望宏、〈関西〉坂手日登美、全リンダ、田中孝弥、棚瀬美幸、土橋淳志、〈東海〉佐久間広一郎、ほりみか、本島勲〈仙台〉いとうみや

【広報部】篠﨑光正◆菊川徳之助、篠本賢一、森井睦、流山児祥◆〈東京〉糸山裕子、井上ほーりん、磯村純、大杉良、小川功治朗、黒澤世莉、ゴトウモエ、鈴木美恵子、長沢けい子、林未知、平尾麻衣子、三谷麻里子〈関西〉木嶋茂雄、田中孝弥〈東海〉ほりみか

【教育出版部】ふじたあさや◆青井陽治、鴻上尚史、流山児祥◆〈東京〉佐々木治己

【法務部】西川信廣◆鵜山仁、小林七緒

【地域交流部】流山児祥◆鴻上尚史、坂手洋二、深津篤史◆〈熊本〉村上精一〈東海〉水野誠子、〈仙台〉なかじょうのぶ

【観劇案内】〈東京〉遠藤栄蔵、〈関西〉木嶋茂雄、〈東海〉金子康雄

【日韓演劇交流センター委員】小松杏里、松本祐子

【監事】中村哮夫、福田悦雄〈関西〉粟田倘右、今泉おさむ

【評議員】戌井市郎、内山鶉、瓜生正美、栗山民也、福田善之

【事務局長】大西一郎【副事務局長】篠本賢一、斉藤由夏【事務局】上田郁子〈関西〉木嶋茂雄〈東海〉金子康雄

（担当理事、および東京、ブロック（関西・東海）、準ブロック（熊本・仙台・札幌））

各地域活動通信

東海ブロック――東海地方の演劇

愛知は長久手文化の家が町民劇団を擁し佃典彦（劇団B級遊撃隊）が演出19回続けている。また同ホールで日本劇作家協会の「劇王」を開催、柴幸男、鹿目由紀等がチャンピオンに輝いている。戯曲賞は名古屋市文化振興事業団が名古屋文化振興賞（第26回）、愛知県文化振興事業団がAAF戯曲賞（第9回）を開催、新人劇作家を輩出している。パティ池鯉鮒、武豊町民会館は毎年市民劇を継続。また岡崎、豊橋など三河地域の劇団は独自の演劇圏を築いている。歴史あるリアリズム演劇集団もベテラン俳優を先頭に上質な公演を続けている。劇団うりんこ、人形劇団むすび座等の児童劇団は本業以外にも豊富な実験を展開。また練習拠点としてアクテノンの役割は大きい。この地域は公共ホールに恵まれているが民営の七ッ寺共同スタジオ、ひまわりホールなどが健闘している。

岐阜は劇団ジャブジャブサーキット、劇団はぐるま等が健在、可児市文化創造センター（衛紀生館長）は文学座と地域拠点契約を結び公演、ワークショップ、アウトリーチ活動などを展開し始めた。近年瑞穂市あじさいホールで開催している「みずほ演劇祭」、中津川市で始まった「演劇CAMP in中津川」の今後が楽しみ。三重は四日市市で市民ミュージカル、桑名演劇塾が元松竹歌舞伎俳優の演出で時代劇を連続上演している。また劇団すがおの韓国演劇交流、四日市高校演劇部が中部6県代表になるなど。津市以南は把握していないが関西とのつながりの強い地域である。演出者協会員がゼロという状況を今年中に変えたいものである。（敬称略）【木村繁／東海ブロック事務局】

関西ブロック――関西の演劇事情

関西演劇事情を劇場や地域によって大まかな上演傾向ざっくり紹介する（敬称略）◆兵庫◆2月、兵芸文ではピッコロ劇団プロデュース『真田風雲録』上演。公立劇団の存在感を発揮。神戸のKAVCは演劇のほかコンテンポラリーダンス公演に注力。伊丹アイホールは80年代演劇を若手劇団に再生させる「現代演劇レトロスペクティヴ」企画実施◆大阪◆心斎橋ウイングフィールドや日本橋インディペンデントシアターは若手演劇人の発掘と育成に力を注ぐ。エンタメ系劇団が隆盛。大阪市芸術創造館、一心寺シアター、応典院も若手育成。HEPやABCホールが集客力のある中堅エンターテイメント系劇団の公演拠点に。精華小劇場は松田正隆と松本雄吉のコラボで前衛作品『イキシマ』を製作。企画者の演劇と劇場への情熱が結実◆京都◆芸術センターやアトリエ劇研では若手が真摯な演劇的実験作品を多数発信。アート系が隆盛。アートコンプレックスはエンタメ志向。京都芸術劇場は産学協同で学術的プログラムも◆総括◆総じて若手劇団の作品発表は活発だが、新聞や演劇雑誌等の媒体に関西演劇が取り上げられる機会が減少し観客数も減少。新聞社が演劇記者の関西設置を廃止検討、助成金の行政支援の削減など、演劇を取り巻く環境は決して良いとは言えない。今後、関西の劇団は「工房」として関西で創造を深め、東京圏や海外など他地域に向け連携、発信するなどより戦略的経営が必要になるだろう。【木嶋茂雄／関西ブロック事務局長】

新潟――新潟県の演劇事情

新潟県は縦に長く、佐渡島もあり、昔から下越・中越・上越地方とそれぞれの地域で独特の文化圏を育んできた。「新潟の演劇事情」といっても、全域の活動内容や実数を把握するのは難しく、2004年開設した新潟演劇感想『例の掲示板』(http://ak.to/gek)が昨年リニューアル更新した際に調査した「新潟県内劇団情報」が唯一網羅した情報源である。これは感想投稿サイトで、同時に公演カレンダーの製作を目的としている。ここの3月現在の劇団数をもとに話を進めたい。

県下で公演等の活動をしているのは40団体ある。新潟市を中心とする下越地域が半数の20団体、施設も「りゅーとぴあ」劇場（868席）等の公共ホールや小劇場・小スペース空間が幾つかあり、自前のアトリエを持ち、長く活動を続けている老舗的な劇団も散見される。

中越地域には15団体があり、長岡市の「リリックホール」は専用劇場（450席）を備え、開館以来13年連続で演劇祭を企画している。また、「ながおか劇ネット」を組織し、地域演劇情報をメール会員に発信している（現在約200会員）。他に燕市、魚沼市、南魚沼市、十日町市、柏崎市と劇団活動は広範囲に渡り、各文化会館等を中心に演劇祭を開催しているのが特徴である。

上越地域は、上越市を中心に5団体の活動があり妙高市で演劇祭が開催されている。

機会があれば、それぞれの地域の詳細情報についても報告してみたい。【井上ほーりん／日本演出者協会広報部】

愛媛――愛媛の演劇事情

愛媛県内には約30位の演劇活動をしている集団があります。その多くは松山市に集中しています。学生劇団、公共ホールと組んでの参加型の市民ミュージカル、市民演劇なども含みますが、一時期に比べ減少しているように思われます。しかし、シニアの人たちのグループは、同好会的なものから、本格的に取り組むところなど様々ですが、地域密着型で活発なようです。

先日、若手の人たちの「旗揚げ公演にしてサヨナラ公演」というのに出くわしました。とても興味深く、新鮮なものであっただけに、これで終り？　なんで！と、非常に残念な思いがしたものです。集団を組むのが煩わしいのか、事情は分かりません。最近は劇団活動よりも個別の活動をする人たちが増えてきているように思います。

芝居は大勢の人の力を借りなければ作れないので、志を同じくする者たちが集り、表方も裏方も喧嘩しながらというのは遠い昔の幻なのでしょうか。本番ばかりを楽しみ、軽やかに渡り歩く人たちのお芝居は、ソツが無くそれなりに面白く見せて観客も楽しんでいる風ですが、金太郎飴さながらにそろそろ飽きがきているようにも思うのですが……

このような事情は愛媛だけでなく全国的に同じようなものかもしれませんが、理念を持った新たなリーダーの出現が待ち望まれるところです。【鈴木美恵子／日本演出者協会広報部】

福岡――街の魅力目指して

福岡は県という単位でみると、演劇祭の多い地域のようだ。県内の一番大きな都市・福岡市では福岡演劇フェスティバル。それより以前から開催されている北九州演劇祭。

また少し前から久留米演劇祭も始まった。昨年の福岡演劇フェスティバル終了後には、北九州と福岡の演劇祭を比較した記事も出た。私がかかわっている福岡演劇フェスティバルについて書くと、このフェスは実行委員会形式をとっており、主催は行政側である福岡市、福岡市文化芸術振興財団と民間側である西日本

鉄道㈱、㈱イムズ、天神エフエム㈱。その事務局を私が代表を務めるNPO法人アートマネージメントセンター福岡がおこなっており、本年（2010年春）で第4回を迎えることになる（プレも入れると5回目）。期間は4月、5月の2ヶ月間となっておりGWに開催される福岡最大のお祭「どんたく」の時期とも重なっている。本年はこの期間に9団体・20公演が上演されるので、ほぼ毎週末に福岡の中心地で公演がおこなわれていることになる。東京や大阪の劇団等を各ホールが誘致する「招待枠」、九州・山口で活動する団体を対象とした「チャンス枠」、福岡市文化芸術振興財団が演出家の育成を目的に実施している創作コンペティション（これについては公募範囲が全国なので、演出家の皆様是非ご応募ください）に、今年は地元ホールが応援企画枠を作ってくださり、福岡市内の参加劇団が増えた。毎年少しずつ形を変えながら、街に舞台芸術が根付いていくことを願って実施している。「住んでみたい街」の特集で、必ず上位にランクされる福岡市。商業ベースに乗らない舞台芸術を、行政だけでなく民間側も積極的に支援してくれているこの街の懐の深さが街を魅力的にしているのではないかと、自負している。

【糸山裕子／NPO法人アートマネージメントセンター福岡代表・福岡演劇フェスティバル事務局長・日本演出者協会広報部】

宮崎

演劇状況2010／宮崎県

宮崎県の演劇の状況が客観的に見て面白いのかどうか、それは、その内部にいる私たちにはわからない。人口100万人、劇団の数は約20。しかしその中できちんと活動している劇団はその半分だろうか。

そんな中2007年、「みやざき演劇祭」がスタートした。

この演劇祭にはいくつかの特徴がある。ひとつには、主催を「みやざき演劇祭実行委員会」とし、県内の演劇人が個人としてその企画・運営に参加するとともに、財団法人宮崎県立芸術劇場が共催としてこの演劇祭を支えていることである。簡単に言うと、演劇人たちと劇場が手を携えながら開催する演劇祭であるということである。

そうして動きだした新しい「みやざき演劇祭」では、毎年メインプログラム4作品と数本のフリンジ作品を上演し、いずれも好評を博している。ことにメインプログラムのプロデュース公演では宮崎出身の演劇人と宮崎在住の演劇人が協同して、毎年質の高い作品をつくりだしている。本田誠人さん（ペテカン・宮崎県延岡市出身）作・演出の『茜色の窓から』、古城十忍さん（宮崎県小林市出身）作・演出の『パラサイト・パラダイス』など。

宮崎県の演劇の状況が客観的に見て面白いのかどうか、それはやはり私たちにはわからない。しかし私たちは、いや少なくとも私は、その状況を面白がるしかないだろうと思っている。さてそこから何が生まれるのか、それが分かるのはもう少し先の話なのだろう。

【永山智行／劇団こふく劇場・財団法人宮崎県立芸術劇場演劇ディレクター】

新会員紹介

（09年7月～09年12月入会）

石橋和加子（いしばし・わかこ）

劇団「コスモル」主宰・脚本・演出・出演。出身在住：横浜。玉川大学芸術学科油絵科卒。2000年の「コスモル」旗揚げより、年に2回下北沢をホームとして活動。歌・ダンスはもちろんコメディー&シリアス・舞踏や身体表現までも盛り込む、賑やかで大胆で自由な演出は、実はエンターテイメント性が高く芸術性に溢れているつもり。3歳の子供からお年寄りまで芝居を見慣れぬお客様にも楽しめる国民性の高い舞台作品（歌舞伎やオペラをヒントに）を目指す。自ら役者の鍛錬として学んだ事の伝授、今を生きる現代人の心の闇には〈芝居〉が必須と信じ、初心者育成の演劇WSも不定期に行う。▼2003年『ASS』下北沢OFF・OFFシアターにて東京都歴史文化財団より助成金を受ける。▼2005年『GREEN（C）OPERA?』下北沢OFF・OFFシアターにて若手演出家コンクール2005の優秀賞受賞。▼2008年 企画公演『大コスモル市』ではタレントあご勇氏を迎えコント演出担当。▼「コスモル」HP：http://www.estyle.ne.jp/cosmol/

板倉哲（いたくら・てつ）

1958年1月28日名古屋生まれ。▼秋田雨雀・土方与志記念青年劇場文芸演出部・演技部所属。同付属養成所専任講師。▼演出作品／2005年2月『気配―第三帝国の恐怖と悲惨より』B・ブレヒト作、板倉哲上演台本。▼2009年7月『キュリー×キュリー』J・N・ファンウィック作、板倉哲上演台本。（2010年6月より全国巡演）▼その他、青年劇場の上演作品で演出助手を多数務める。

金田海鶴（かねだ・みつる）

フリーです。2007年から「演劇のちから を市民に還元する」世田谷パブリックシアターの企画に参加しました。その時は、三島由紀夫が切腹した理由を考えるためのイメージシーンを作りましたがかなり不審に思われたようです（笑）。真剣に練習をして、ヘロヘロでも細胞がさか立ちしているような新鮮な時間でした。見知らぬ者同士が、体験と妄想を持ち寄って、生きている今を確認する作業でした。演劇や舞踏では、「思い」が空間を変えてしまうと知りました。▼アクションやオブジェクトシアターの方などに誘われて、ありがたく、いろんな形で参加させていただきました。もっと知りたい、見たいと、見苦しい我であります。

河口琢磨（かわぐち・たくま）

所属：劇団京芸▼プロフィール：昭和54年生まれ、兵庫県尼崎市出身。▼01年『創作集団Neo―Spirit』（通称ネオスピ）結成、02年旗揚げ。▼関西小劇場を中心に、年2～3回の公演を行う。▼05年、『劇団京芸』入団。▼08年から、劇団京芸の稽古場である『D．D．シアター』（ダイヤモンド・ダストシアター）を使用し、年に1回はネオスピの公演を行っている。▼【ネオスピ主な作品】08年『スノートレイン』、09年『籠の中の虜～Prisoner in Cage～』、10年『かくれんぼ～Lise and Truth～』旗揚げから全公演の脚本と演出。▼【劇団京芸主な作品】09年『進め！ウルトラ整備隊』、京芸での初演出。

倉品淳子（くらしな・じゅんこ）

劇団山の手事情社所属。俳優、演出家。▼1990年より俳優として劇団山の手事情社にて舞台表現を追求する傍ら、演劇の可能性を求めインプロや大道芸にも活動の場を広げる。スイス、ドイツ、ポーランド、ルーマニア、韓国など海外での公演も多数。▼演出の代表作品『ひかりごけ』（韓国大田市演劇祭参加作品）、『十年音泉』（えずこホール十周年記念）『よろぼし』（主催：明治安田生命エイブル・アート・ジャパン）など。特に60歳以上の女性の特異な身体性と精神性に興味を持ち、彼らを俳優として起用することに新しい演劇の可能性を感じている。現在は俳優の活動のほかに市民劇の演出や、小・中学校のワークショップも定期的に行っている。

駒澤暁子（こまさわ・さとこ）

ゆでたまごの会所属▼1982年新潟県長岡市生まれ。▼米、フィンドレイ大学演劇学科卒。在学中、『Last Train To Nuroc』（作＝Arlene Hutton）を初演出。▼近年は新潟県内で役者、演出助手として活動。▼昨年、中津川演劇キャンプにて協会に入会させてい

ただきました。今後、協会を通して学んでいきたいと思っております。よろしくお願い致します。

笹浦暢大（ささうら・のぶひろ）

1977・8・22 A型 北海道釧路市生まれ。横浜、藤沢育ち。▼多目的ホールであるラゾーナ川崎プラザソルの運営・技術統括として劇場の運営に係わりつつ、同劇場の企画として発足した文化芸術を発信する団体「川崎インキュベーター」の役員として、現在は周年行事として定着している演劇公演「川崎インキュベーター合同公演」の演出家として活動している。「誰でも楽しめる大衆娯楽としての演劇」を推進しており、舞台監督としても数多くの現場を経験し、装置、機材に精通している特性を生かした、従来の演劇的手法に囚われない、より大衆向けに特化した「総合エンターテインメント」的な作品作りを得意としている。

柴崎喜彦（しばさき・よしひこ）

人形舞台俳優。演出。▼人形劇団ブーク所属。日本人形劇人協会所属。▼97年より、ブルガリア国立演劇アカデミーの芸術監督であり演出家のNikolina Georgievaを師事。▼［主な演出作品］A・ローベル原作『ぼくのおじさん』（01年厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財受賞。）▼T・アンゲラー原作『すてきな3にんぐみ～もうひとつの話』（06年都民芸術フェスティバル助成、児演協主催合同公演）▼新美南吉原作『てぶくろを買いに』（08年第20回世界人形劇フェスティバル招聘作品）▼演出としてはまだまだ若輩者です。よろしくお願いします。

島田陽（しまだ・よう）

私は役者としての活動がスタートでした。板の芝居は10数本出演。▼映像は、NHKを始め民放各局のドラマや映画など。▼CMなどの広告関係の仕事も多数やらせていただきました。▼また、若手の俳優に演技指導などをさせていただいております。▼演出家としてはJ-Theatreに所属しておりますが、まだ新人です。▼演出の手伝いをしたことはありますが、作品の演出はこれからです。▼現在は、インターネットを活用した繋がり作りによる新しい形を模索しています。▼こちらがブログのアドレスになります。http://ameblo.jp/rokkankoubou/▼まだまだ勉強中の身ですが、よろしくお願いします。

志村智雄（しむら・のりお）

フリー▼前進座で39年間、俳優として活動。演出は「俳小」で実践、修業。▼両劇団でスタニフラフスキー、ブレヒト、時代劇、歌舞伎に触れてきました。▼「代表作」というものはありませんが、俳小公演『どさ廻りのハムレット』（原題『兄殺しの報い』）はルーマニア、ドイツで上演。特にドイツのゴータ城での公演は、生涯忘れられぬ想い出です。▼世界の戯曲家作品を一作でも多く上演するのが夢です。そして、演劇人として死に場所を今、捜して徘徊してます。

杉本恭（すぎもと・たかし）

▼昭和46年10月24日愛媛県松山市道後に生まれました。地元の高校を出て、福岡の九州芸術工科大学画像設計学科に入学。卒業後、上京し、ラサール石井氏の元でお笑い、演劇などを学びました。現在はふるさとに戻り、ライブ、公演を敢行しています。一応まだ、石井光三オフィスにタレントとして所属しています。▼これまでに演出した代表作品は特にありません。しいて言うなら、自分のお笑いライブでのセルフ演出ぐらいです。最近は町内の敬老会などの出し物の演出をしています。▼今回「演劇大学inえひめ」で、流山児さんに久しぶりにお会いし、入会させていただきました。みなさま、よろしくお願いいたします。

田坂哲郎（たさか・てつろう）

非・売れ線系ビーナス主宰。1983年沖縄県生。19歳の時、博多青松高校演劇部を母体に旗揚げ。以後、ほぼ全ての公演の作・演出をてがける。代表作『千鳥ヶ池』『20世紀累ヶ淵』『彼女のカルテ』。▼言いよどんだり、言い間違えたり、つっかえたり、勘違いしたまま話したり、省略しても通じたり、はなしことばって面白いと小学生の時に思ってから、ずっと興味が薄れないまま今日に至ってしまいました。福岡では、とうのたった若手、みたいな位置でごそごそやっています。はやくみなさんとお知り合いになりたいです。

難波和彦（なんば・かずひこ）

演出者・劇作家▼劇団西荻Bowm（げきだんにしおぎボウイ）代表。▼劇団青年座研究所18期卒業。▼演出作・ホワイトエンジェル『チャリンコあげたいな』、劇団西荻Bowm『天国に一番近い部屋』、『ベガーズバンケット』等。▼演劇のいろんな可能性にチャレンジしていきたいと思っています。

布宮和明（ぬのみや・かずあき）

劇団「隕石のかけら」主宰。愛知県春日井市出身。21歳より名古屋にて役者として活動。26歳で上京。某大手劇団で制作スタッフとして、劇団運営を学んだ後、2005年、劇団「隕石のかけら」を結成。同劇団にて、ヘヴィメタルバンドとのコラボレーション公演『革命コラボレーション』『ウエディングドラム』をライブハウスにて上演（演出・出演）。2008年、単身フィジーへ。同年4月、劇団初の海外公演『in FIJI』を上演（演出・出演）。帰国後、フィジーでの経験から環境問題にも関心を抱くようになり、今後は、環境問題も絡めた、より視野の広い演劇を目指したいと考えている。今年秋、劇団「隕石のかけら」公演予定。

ぱく・ばんいる

TYPES所属。▼滋賀県出身、名古屋市育ち▼B型 乙女座▼文学座研究所、円研修科で3年間の演劇講習を受け、劇団シェイクスピアシアターに参加。演出家・出口典雄氏に師事。1999年1月、TYPESを設立。▼シェイクスピア作品を中心に年間3～5本の作品を企画・製作、昨年10周年を迎える。▼［演出・代表作品］TYPES公演▽『マクベス』（青山円形劇場・俳優座劇場）▽『リア王（新国立劇場PIT・新宿シアターモリエール）▽『ハツカネズミと人間』（俳優座劇場）▽『恋とグァテマラ』（新宿シアターブラッツ）▽『ハムレット』（俳優座劇場・新宿シアターモリエール）▽『朝・江戸の酔醒』（俳優座劇場▽『冬物語』（光が丘IMAホール）▼これからも、楽しみ、コツコツと作品と向き合って行きたいと思います。

樋口圭介（ひぐち・けいすけ）

新潟県長岡市 Area-Zero所属。▼出演歴『署名人』『冬のサボテン』『動物園物語』『14歳の国』他。▼所属の旗揚公演を主催者の六つ年下の弟に無理矢理観させられるまで、全く演劇に関わりがありませんでした。悪態を付き過ぎた為引くに引けず、現在に至っております。▼そんな折飲み会の席で、翌日に日本演出者協会の忘年会があると聞き付け参加し、演出経験が全く無いにも関わらず、無理矢理入会してしまいました。▼狭い地域のみで活動して来ましたが、演劇を通じて人との関わりが増えて来ました。これからは意識を高めて様々な事を吸収し、少しでも伝えていきたいと考えています。宜しくお願い致します。

堀益和枝（ほります・かずえ）

演劇企画「ある」主宰。広島県出身。学生時代から2007年3月まで愛知県にて活動。その後、東京にて活動。▼愛知県では自分の演出活動とは別に、故竹内敏晴氏の主宰する「からだとことばのレッスン」に通い、氏の演出によって演技者として舞台に立つ。▼昨年9月に第1回公演『理水（原作：魯迅）』を上演。7月には第2回公演を予定。▼愛知県時代から抽象的だの不条理だのと言われてたが、舞台を生活の視点で見直すことを大切にしている。第2回公演は日常の話を日常とは違う視点で捉えた作品を上演予定。爪でひっかいたら消えてしまいそうなこの世界で、確かな実体のある舞台を作っていきたい。あなたも私も「ある」と思えるように。

増田再起（ますだ・さいき）

所属＝劇団芝居屋▼プロフィール：昭和42年～55年　劇団転形劇場に所属　出演作品『小町風伝』他▼昭和58年～平成元年　花柳寿登芳舞踊団の構成演出▼昭和61年10月　処女作『夢の痕』を北芸に書き下ろし発表。以後創作活動に入る。▼平成7年～平成10年　ゼロ企画作・演出。▼平成7年～平成17年　北海道釧路子どもミュージカルキッズロケットの脚本・演出を担当。▼平成11年　演劇塾ＭＪ　作・演出▼平成13年9月　劇団芝居屋創立　現在に至る。▼「代表作」劇団芝居屋公演全作品▼表現者としての自立する役者創りをコンセプトに、その為の芝居創りとして「覗かれる人生芝居」の確立をめざして劇団芝居屋を立ち上げました。▼表現者として世に問う為には、その人にしかできない唯一のものを生み出していかなければなりません。役者も又しかりです。▼表現者たる役者として、その役者にしかできない唯一の演技、取替えの利かない役者としての存在を実現する為に、その手助けができる芝居創りを劇団芝居屋の活動を通して続けて行きたいと思っています。

松坂晴恵（まつざか・はるえ）

1951年生まれ。岡山県出身。▼1999年、江戸川区に地域密着型のミステリ劇専門劇団『劇団フーダニット』を創立し、以来、すべての作品を演出。俳優としても出演。トマ、クリスティ、プリーストリー、日本の推理作家の書下ろし作品などを上演。芝居好きよりも、ミステリ好きの観客が多い、という一風変わった劇団で、多くはないがコアな観客がいて、どうにか10年間続けてきました。年1回の本公演とは別に、小さなライブハウスでの朗読や、地域のコミュニティ会館で小作品を上演も行っています。▼主な演出作品『罠』『ナイル殺人事件』『危険な曲がり角』『毒を入れないで』（若竹七海）『こ霊前』（辻真先）、朗読劇『黒蜥蜴』『顔』など。

弓澤玲子（ゆみさわ・れいこ）

地域での演劇の裾野をひろげたいと、1985年に海老江寛氏のご協力をいただき劇団EBIEを発足しました。現在、建築設計の仕事のかたわら、劇団主宰の活動を続けています。▼主な演出作品は、R・ベロン作『木曜日の女たち』、黒井千次作『家族展覧会』、井上ひさし作『人間合格』▼一般に定年といわれる年齢にさしかかる頃に入会し、場違いのところに入れていただいたような気恥ずかしさを感じています。しかし演出は好きな仕事です。演劇も建築も、創り上げる魅力がいっぱいで、逃れられそうにありません。刺激を受けて自分を磨くよう心がけたいと思います。▼劇団ＮＬＴ養成所卒業　毛利菊枝演技研究所卒業。▼劇団ＥＢＩＥ（ゲキダンエビエ）。

渡辺えり（わたなべ・えり）

劇作家・女優。1978年「劇団3○○」を結成（98年に解散）『ゲゲのげ』（1982）岸田國士戯曲賞、『瞼の女』（1984）作・演出にて紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。01年から「劇団宇宙堂」（07年に「オフィス3○○」に改名）主宰。07年『りぼん』で劇団の活動休止を宣言。また、演劇のジャンルを超えた活躍も目覚しく、04年には中村勘三郎の勘九郎時代最後の演目、舞踊劇「今昔桃太郎」を、07年には歌舞伎第二弾となる「舌切雀」の作・演出を手掛け大きな話題となった。08年『瞼の母』（演出）。2007年9月に「渡辺えり子」より「渡辺えり」に改名。「今だからこそもっともっと演劇を！と、入会を決意しました！」。

渡部和也（わたなべ・かずや）

21歳で地元劇団に入って暫くすると、どんな稽古をすればいいんだろう？　東京ではどんな稽古をやってるんだろう？　などと疑問が湧いてきて、自分なりの稽古をやり始めました。すると、6年間在籍した劇団をクビになりました。▼その後、演劇ネットワークOffice59という場を作って、稽古と自作公演を中心に活動を行っています。▼稽古の中身は紆余曲折を経つつ、現在は身体から生まれ出てくる動きや言葉を、どれだけ大切にできるかにこだわっています。▼昨夏の演劇大学inえひめの参加者を中心に、シニア劇団くくく楽会が誕生しまして、そこの演出も担当しています。シニアならではのあり方を模索中です。

◇　◇

退会者（09年10月～10年3月）

▽岡村春彦（フリー）▽永曽信夫（フリー）▽関口潤（フリー）▽竹松雄二（オーガニック・シアター）▽長沢克雄（俳優座文芸演出部）▽古林逸郎（演劇企画集団66）▽牧武志（劇団海風）▽村木悦朗（フリー）（五十音順）

新しい日本演出者協会会員をご紹介ください
会員のメリットをお知り合いに広げよう！

1 会員手帳（会員名簿）が毎年送られます。
2 会員および関連団体の演劇公演のうち、観劇案内に掲示された公演を招待観劇することができます。
3 観劇案内と理事会報告、協会の主催事業について掲載された「協会誌D」が送られてきます。
4 文化庁募集海外研修（留学）「在外研修員」の応募に、協会からの推薦を受けることができます。
5 協会主催の研修会、セミナー、会議に実行委員として企画・運営に参加できます。

お問い合わせ先
TEL03-5909-3074
FAX03-5909-3075
kohobu@shinozaki.ecnet.jp

コラム

篠﨑光正　ここだけの話……　この秋に！　劇場法!?

劇場法が目前に迫ってきた！　参議院選挙で民主党躍進がほんものになれば、いよいよ現実だ！　巷で囁かれているように、劇場法は使い方によっては問題ありの我が国初の法律。すでに勉強会やら準備委員会に出席され万全の対応をされている協会員も多く、ネット発言も急増している昨今だが、この秋を目前にしてさらなる問題も浮上してきた。指定管理者への他業種からの参入や、芸術監督は誰がやるのかについても、現実がぼんやりだが見えてきた。公演（劇団）助成から劇場助成へシフトする流れに劇団関係者は戦々恐々だ。地方に関しても、アーティストリゾート創造事業（劇団付き劇場による地域創造事業）など公立劇場が劇団を選ぶという構想にも、異論が噴出している。中央集権ではなく、それぞれの地域の実情を鑑みて劇場が存在する地方分権が本来であり、一律に基準を中央から決めてしまうのはいかがなものか。それにしても、この劇場法については芸術文化の陰にさまざまな複合的な課題が見え隠れしている。全国のホールや劇場が改修期、指定管理者制度に他の業種が参入、芸術監督の選出、団塊の世代の退職期など。この法律制定の議論は文化関係者だけではなく国民レベルでの開かれた議論が必定である。

アンケート　演出者の仕事

① 演出を始めたきっかけは？
② 演出者じゃなかったらやりたいことは？

気にはなっていたけど知らなかった、各演出者の始めたきっかけ。やはり様々あるものですね。そして演出者じゃなかったら……皆様、結局は表現の道がお好きなようですが、中には意外な道も。この限りではないのでしょうね。55名の回答（内1名無記入）をいただきました。ありがとうございました。〔編集部〕

浅田直也㊚
①後進（若手）の指導の役まわりになり、その子達が育ちはじめて、どうしても、制作公演の時、演出するようになりました。
②元々役者ですので、芝居以外のことを考えてもやっぱり美術でも大道具でも、もちろん俳優でも。やっぱり舞台にかかわりたい。

磯村純㊚
①恥ずかしながら学生時代は劇作家を目指していたのですが、劇団に入団し稽古場で先輩方の演出にふれているうちに、「俺も演出をやってみたい…」と思ったのがきっかけです。
②根っからの目立ちたがり屋なので、俳優を目指しているかもしれませんが…（笑）演劇関係の仕事にはついてると思います。

板倉哲㊚
①自分の劇団にそのポジションが不足していたから。
②役者。二足のわらじは私にゃムリ。

井上ほーりん㊚
①学生時代に演劇研究会に所属し、二年次に自分の書いた戯曲を上演してみたくなり、自作の演出家に立候補し、選考会に提出し選出されたこと。
②小学生の頃、漠然とクラシックギターリストになろうと思っていました。

今泉おさむ㊚
①「高校演劇」三年生になると当然のように。社会人になってからは高校演劇後輩の劇団に依頼されて。それから次第次第に現在に至る。
②さして、特に人生の方向性は考えていなかったろう。

うちやまきよつぐ㊚
①役者オンリーの時代に恩師の松浦竹夫先生に『熱海殺人事件』を演出して欲しいと云ったら、私は忙しいから自分で演出しなさいと云われたのがキッカケ。
②演出と平行して役者や、演技のコーチ等、演劇にかかわる事を常にしているので特にやりたい事はない。強いて云うなら映画監督かな。

大杉良㊚
①役者になろう！と思って初めて参加した舞台で、その演出家の仕事をみてすぐ、演出家になろう！！と思った。
②僧侶

大山浩㊚
①高校時代、クラブ活動の合唱部で毎年オペラを上演していて、ステージ処理を工夫する楽しさを味わったこと。
②音楽活動。

小川功治朗㊚
①自分が観たい作品をつくりたいと思ったからです
②料理人

加藤明美㊛
①ヨーロッパのシュールレアリズム・ダダイズム・世紀末芸術などをインスピレーションの源泉とするカウンターカルチャーとしての劇団を立ち上げようと思った事から始まった。
②ひとつの表現手段として、演出者であり女優である。どちらが向いているのか今でもわからないが他のジャンルとしては音楽と舞踊（踏）

加藤敏雄㊚
①役者より主張できるから。脚本の理解（解釈）で劇団の他人にはまかせられなかった。
②制作。

金森健一㊚
①高校生演劇部生徒の指導のため。
②本屋さん。

神澤和明㊚
①「演劇講座」や「ボイストレーニング」を地方行政と協力して行っていましたが、指導の一環として上演を行っているうちに、結構な数を演出していました。
②舞台に関する分野では「音響」です。今でも自分の演出する舞台の音響は、音楽も含めて大体自分で作っています（練習時使用）。本番用のものは専門家に依頼しますが。

木崎裕次㊚
①自分が俳優には向いていないと自覚したので。
②制作者。今は俳優もやってみても良いと思っている。

黒川逸朗㊚
①所属していた劇団を退団し、高校の演劇科の講師として演技指導を行った事から、演出の面白さに目覚めた。
②役者または劇作家…可能であれば…です。

小林和樹㊚
①演技をしていて、他の演出家が余りに拙かったから。乃公出でずんば…也。
②ない。

小林拓生㊚
①元々プレイヤーとして渋谷ジァンジァンを中心に一九八八年から十年間活動していて、二〇〇〇年に渋谷ジァンジァンが閉館することになり、活動の締めくくりとしてシェイクスピア作品『夏の夜の夢』を一九九九年七月に演出したことがきっかけです。
②ピアニストかプロボクサー。

佐川大輔㊚
①「自分がやりたい芝居」を演出してくれる演出家が身近にいなかったから。（役者出身の演出家なもので、私は。）
②今は特にない。二十年若ければロックバンドをやりたかった。

笹浦暢大㊚
①ついていた演出家を観て自分でもやりたいと思ったから。
②演出以外にもやりたいことは同時にやっているつもりなので、別にさして思うことは無い。幸せな人生です。

塩見哲㊚
①虚構創作現場の人間関係の実態把握に関心。
②台本作家。

篠崎光正㊚
①芸術に興味を持ち美学を勉強したのがきっかけです。
②建築家。

篠本賢一㊚
①俳優をやっている時、稽古場での演出家を見て、あちらの方が面白いんじゃないか、と思った。
②建築家。

島田陽㊚
①俳優として映像や板の芝居を経験するうちに、自分で演出したい作品に巡り会ったため。

アンケート　演出者の仕事

②俳優や演出家を始めとする表現者向けのコンサルタント。

志村智雄(男)
①先輩から〝劇団の若手を育ててほしい〟と頼まれ、演出に手を染める。
②古本か古道具屋の親爺かな?あるいは映画畑でスタッフをしているかな。

杉本恭(男)
①成りゆき。気がつけば演出のようなことをしていた。
②歌手。

園山土筆(女)
①なぜか小学校三年生(『白雪姫』)の時から演出をしていました。
②グラフィックデザイナー。

高取英(男)
①高校の文化祭で戯曲を書いた友人に頼まれたのが最初。大人になってからは戯曲を友人の劇団に提供してきたが、劇団を創立したため。自分で演出した方が何かと便利(笑)。
②古本やさん。舞台だと照明。

高橋英子(女)
①日本大学芸術学部演劇学科演出コース入学
在学時代作品(a)演出助手1作目
岸田國士作『動員挿話』(b)演出1作目　小山祐士作『秋の歌』以上。
②無回答です。

田坂哲郎(男)
①高校の演劇部に入部し、自分から志願しました。
②既にしてますが、脚本を書いていたいです。舞台に関係ない仕事なら…やっぱり文章書いて生活したいです。

棚瀬美幸(女)
①演出をする人がいなかったから。
②※記載なし

田辺晴通(男)
①劇団運営の立場として。
②不明。舞台監督的なことだったかもしれない。制作的なことと両立させている。

外波山文明(男)
①劇団を旗揚げして誰も演出する人が居なかったから…単純です。
②役者やっています。映画も撮りたいですね。ヒモ。

中西和久(男)
①自分で自分の為のひとり芝居を書いたから。
②俳優・劇作・旅行家・ピアニスト・占い師・書家・画家・写真家・登山家・咄家・駅伝の選手・陶芸家・宇宙飛行士。

中村哮夫(男)
①終戦直後から映画少年でカントク志望だった。大学の頃から演劇青年となり、ごく自然に芝居の演出に移行した。
②クラシック音楽の指揮者。

難波和彦(男)
①芝居が好きだから。
②結婚。ミュージシャン。

西川好弥(女)
①所作指導をしていた日本のオペラで頼まれたのが最初です。
②考古学。

西田了(男)
①学生時代、浅草で軽演劇の舞台裏を手伝った事がきっかけになった様に覚えています。
②新聞記者になる事を夢見ていた時もありました。

野崎美子(女)
①自分の中の演出目線に気づき、それを生かしてくれる人々に出会ったことによって。
②俳優。

野田雄司(男)
①俳優を志したが、身体的な病のため演出に転じた。
②俳優か声優。

林英樹(男)
①劇団の演出家が蒸発したため急遽。あまり向いてないと思い、その後、他の人に頼んだが、うまく行かず結局やることになる。
②特にありません。昔は報道関係の仕事を志望。

平尾麻衣子(女)
①幼少時より舞踊を習っており、母が主宰する劇団の舞台で学生時代から振付をしていました。演劇の振付をするためには演出の勉強も不可欠でしたので、自然に演出も手掛けるようになりました。
②現在も演出以外に制作・企画・振付・衣裳デザインなどなど手掛けております。演出の他にもやりたいことだらけですが、海外でアートプロデュースの勉強が今一番したいです!

平野智子(女)
①舞台の作り手になりたかったから。
②テニスのインストラクター。

福田逸(男)
①いつのまにか…。
②役者・訳者・作者。

藤本剛(男)
①何も希望のない学生が演劇部に入り、唯一のとりえとなる。
②歴史(世界史)の先生。

堀益和枝(女)
①高校生の時、モリエールの「人間嫌い(内藤濯　訳)」を学校内で上演したのが初めの演出。現代に置き換えて、自分なりの解釈を軸にして構成していった。また、自分なりに様々な訳を参考にして、上演台本を作った。今思えば、あまりにも稚拙で闇雲に探る行為であったが、これが演出の面白さにはまったきっかけです。
②戦場のカメラマンか報道記者(笑)。ありすぎます。

ほりみか(女)
①三歳からバレエを始め、ダンサーとして芝居に出演。その後、役者→振付→演出と、流れのままに。
②国際開発(国連・JAICAなど)

増田再起(男)
①一九八六年に日本舞踊リサイタルの構成演出を担当。
②画家。

又川邦義(男)
①仲間と劇団立ち上げた時、年長者だった為。
②料理人か陶芸家。

松坂晴恵(女)
①地元の小さなサークルに入ったら、演劇サークルに顔を出したら、演劇経験者が一人もいなくて、必然的にやらざるを得なくなってしまった。
②純粋に、ただの俳優。

松田寛子(女)
①勤務校で演劇部の顧問になったこと。
②役者。

水本洋(男)
①演技指導の先生(演出家・和田和佐)に指示されて始めた。演技者から演出家へのきっかけ。
②照明家、又は舞台美術家。どちらも好きだ。

三谷麻里子(女)
①中学から演劇部だったけど、自分が演じるより誰かがやってることについて考える方が楽しくて「こっちの方が向いてるかも」と思ったのがきっかけ。
②専業主婦。エッセイとか書いてたまに賞金とかもらう感じの。

宮永あやみ(女)
①大学の演劇部で演出をしたのがきっかけです。
②料理人か、オペラ歌手。

山下裕士(男)
①所属していた団体の芝居が面白くなくて、自分で作る様になった。
②脚本家(既にやってますけど)

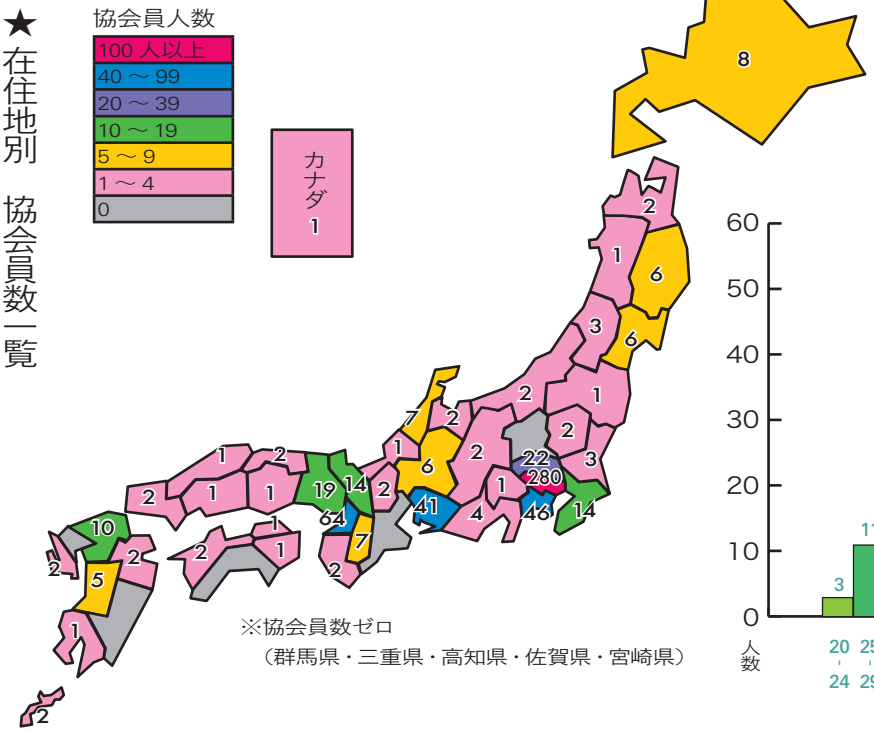
弓澤玲子(女)
①発足時から指導頂いていた先生(海老江寛氏)が逝去された時から。
②俳優、舞台美術　共に担当しています。

渡辺えり(女)
①小学校のお誕生日会で台本を考え、なんとなく演出していた。
②絵を描く。

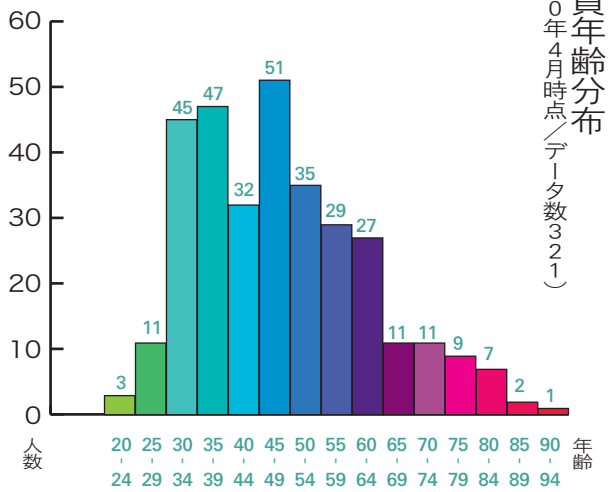
渡部和也(男)
①最初にいた劇団の代表に勧められました。
②役者も裏方も、舞台に関わることなら、何でもやりたいほうです。ただし、素敵な演出者のもとでやりたいです。

データで見る演出者協会

★在住地別　協会員数一覧
（2009年9月時点／総データ数602）



★協会員年齢分布
（2010年4月時点／データ数321）



今回は協会員の活動地やその年齢層の実態を知るべく、3つのテーマでデータを収集しました。

①在住地別協会員数。②協会員年齢分布。③出身地から活動拠点への推移。

①は今年発行の住所録に記載の住所より抜粋して、協会員の現住地を割り出しました。圧倒的人数なのが、東京を含む関東エリアですが、その多さの理由はやはり活動のしやすさ、集客力などが挙げられるのでしょうか。反面、注目したいのが、近年、協会の「演劇大学」などの開催により、関東以外の地域で活動している方々の入会が増え、大きな意味での演劇の広がりを確認することができました。

②は現存する入会申込書より抜粋した上に、今回のアンケートにて各会員の生年月日を伺う方法で調査したのですが、アンケートは総数55通で総会員の10分の1に満たない回収率と残念な結果になりましたが、申込書などの情報を併せてなんとか半数まで収集したので、比率的には全会員の年齢分布を伺える結果となったと思います。本当に幅の広い年齢層の方々で構成されている協会であることを再認識したと同時に、よくうたわれている世代間交流がもっともっとなされればよいと感じます。

③はアンケートにより会員の出身地と、その後の推移を調査することを目的としておりましたが、先に述べたように回収率10分の1では、データとして集約した表にまとめるには至りませんでした。が、いただいた貴重な回答から、少ない情報ながら2つの傾向が見受けられたので列挙いたします。一つ目は、東京、大阪などの都市部に在住しながらも、その活動はその在住地に限らず全国へと向いている方々がいること。もう一つは、在住地と同じにしていなくとも、都市部、地方関係なく、東京であれば○○区、○○県であれば○○市といったように、とても限定した地域を中心に活動している方々がいるということ。その理由は定かではないですが、これもまた演劇が持つ可能性の一面なんだろうと思いました。（編集部）

編集後記

▼協会誌の紙媒体の広報活動はデジタル時代の現在でも効果があることを実感。さらなる充実を図りたい。なお広報部は現在意欲旺盛な部員が増え、今後の充実した活動をご期待ください。入部希望者大歓迎です！　（篠崎光正）

▼近代戯曲研修セミナーがはじまりました。面白い！　戯曲に書かれた言葉の力強さ、美しさ、そして、演劇的たくらみをひも解く作業はとても勉強になります。国際部、広報部の仕事に加え、宿題がまた増えそうです。　（篠本賢一）

▼広報部では、地域の方たちからの情報をお待ちしております。広報部員になって、取材して下さる方も広く募集中!!　（長沢けい子）

▼Twitterで岸田戯曲賞の結果がいちばん早い情報として入ってきたことに本当に興奮したので、マネしてコンクール結果を速報としてツイートしたら漢字間違えちゃいました。御笠ノくんホントごめん！　（三谷麻里子）

▼今年も「若手演出家コンクール」の時期がやってきました。もはや、選抜高校野球と同じくらい春の風物詩です。来年はツイッターで実況中継したいですね。konjirou0114　（小川功治朗）

▼稽古場には大抵一人しかいない演出者。でもこの協会にはうじゃうじゃいる。みんな何か考えてる。本当にみなさんとの交流がおもしろい。　（大杉　良）

▼都道府県別の協会員数を数えながらこんなに全国各地にいらっしゃる事に改めてびっくり。いつかお会いしてみたいなあ…。そして皆様、今回も色々と本当にありがとうございました！　（ゴトウモエ）

日本演出者協会の運営は協会費で行われております。会費未納の方は、納入をよろしくお願い致します。

六行会ホール
RIKKOKAI HALL
〒140-0001　東京都品川区北品川 2-32-3
Tel.03-3471-3200　Fax.03-3471-3426
http://www.rikkoukai.com